
俺と私の英雄戦記

アクア = イスタロス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と私の英雄戦記

【Nコード】

N4950K

【作者名】

アクアⅡイスタロス

【あらすじ】

人は何のために戦うのか…

愛する者を救うため…大切な者を守るため…

2人の男女が生み出す2つの奇跡へと続く物語…

）

男は全てに裏切られた

女は世界に愛された

友は涙に満ちた

敵は血潮に塗れた

なぜ人は傷つけ傷つけられてなお人を愛すのか

)

駄文です、ええ駄文です（笑）

よくある最強物ですが、自分なりに書き綴りたいと思います

シリアス？ダーク？

私には無理です（笑）

現在第一部公開中

2011/8/9追記

この小説は作者の都合上、無期凍結となっています。

この作品をベースにした作品、「Held Fluegel」を新たに開始したのでそちらの方をご覧ください。

プロローグ（前書き）

常に見るだけだった人間の初作品：アイデアは浮かんでも文章にまとめるだけの才が乏しいです（泣）おかしい文や言葉使いが出るかもしれません。温かい目です。よろしくお願いします！

プロローグ

……

…長い…

………とてつもなく…長い…時がたった………

俺は…いつまで…巡り続けるのだろうか…

この…死よりも苦しい…大切な者を失う…悲しみを…

アルストラ暦23年

世界は1つの恐怖と遭遇した…

各地で見つかる古代遺跡から発生した細菌（後にイカナと命名）による動植物の魔物化…

それによる被害が世界を破滅へと陥れようとしていた…

これは2人の主人公が織り成す2つの物語…

ブローグ（後書き）

感想、誤字脱字等ありましたらよろしくお願いします！

第一話 始まり（前書き）

よろしく願いします！

追記：所々変更しました

：説明不足等は感想に書いていただけると幸いです！

4 / 3

第一話 始まり

【????】

…

………

ふああ…よく寝たわ…今日から再び学園が始まるわ…

母：「エリン！起きなさい！遅刻するわよ！」

…ふう…目覚めは最悪だわ…さて早く準備しないと…

私の名前はエリン・カーラー

聖グランベリア学園の2年生です。

自分で言うのも何だけど、勉強も運動も学年で1番です！

さて、私が住むこの街、ガルメア共和国の首都『ラグナ』

今では珍しい鬼神石を採掘出来るのと世界で有数の魔法学園がある
ことが特徴です。

魔法学園では初歩的な魔法や魔法薬の調合、飛行訓練、さらには世界で通用するような応用魔法学などを行ってます。

。りー。ッターを思い出していただければわかりやすいかと思いません。

あつ、鬼神石とは遙か昔、神々が覇権を争っていた時代に敗北した神や鬼と呼ばれる存在が封印された石の事です。

1つ1つに巨大な力が含まれており、最近の魔法使いには必須といわれるほど普及してます。

ランクもあり下から下鬼、中鬼、上鬼、最鬼、下神、中神、上神、最神があり、絶大な力を持つとされる魔神や鬼神、幻神と呼ばれる3大神石があるとされます。

そして、一家に1つ護石があり、家柄が良ければ良いほど良い石を持ち、王家ともなれば3大神石を所有するとかしいとか…。

ただ、個人が持つ時は家柄なんて関係ないです。

個人が生まれ持つ性質や魔力によって持てる石も変わり、貴族だとしても良い鬼神石を持つとは限りません。

ついでに私は水の下神を持っています！

学生では良くて中鬼までだったそうで、前代未聞の力だそうです。意識してないといえは嘘になりますが、ちやほやされて天狗にならないように気をつけないと…。

学園での日程は日によって決まっていますが、基本は魔法学と魔法薬学と体術学が毎日あり、合間に飛行訓練や世界学、基礎数学、闘技学が組まれてます。

え？闘技学ですか？それh

？：「エリン！早く行こうよ！」

エ：「あ、うん！今行くよ！」

ごめんなさいね？授業に行ってくださいす。

【????】

俺は…何故此処にいる…

俺には…やるべきことがあるはずだ…

俺は…あいつを…あいつを守らなければ…

あいつを…エリンを…

第一話 始まり（後書き）

感想、誤字脱字等ありましたらよろしくお願いします！

第二話 もう1つの始まり

…俺は…誰だ…？

どこかに向かっていたはずなんだが…

ああ…ようやく思い出してきた…

俺の名前はアラン…だったか？

家名は…何だろうな？

何故此処にいるかはわからないが1つだけ鮮明に記憶に残っているものがある

…俺の死に様についてだ

あの時、俺は任務に着いてたはずだ

しかし、裏切りにあい、奮戦したが数に押し負けた

とすれば、此処は死者の世界と見て間違いないだろう…なんか殺風景だな

？：「なわけないじゃん」

ア：「！？」

人の気配と察した刹那、武器を構えようとしたが武器が無いことに気づく

？：「あんたは死んでない、永久睡眠をしているだけだ」

ア：「…俗にその状態を『死』と表現されるのでは？」

？：「体が死んでるわけじゃないから問題ないない」

…なんだこいつ…頭が弱いのか？見た感じ、17位の少女だが…

？：「ひどいな…頭が弱いなんて…少し独創的なだけだよ」

ア：「な…俺の考えを…お前…何者だ」

？：「ん…つと…デジオン？」

ズルッ

ア：「それは…ゲームの名前だろ…」

？：「ボケたんだからしつかりツツコミをしてくれないと暇でしょ」

ア：「…で、何者だ？」

？：「私は俗にいう神様だ！どうだ！恐れ入ったか！」

：

……

……

神：「な、なんか言っつてよ…うう…」

ア：「痛い子乙」

神：「うう…馬鹿…」

神様はいじけてしまった

アレンのS度は5上がった

アレンのツツコミは1上がった

アレンのフラグが1立った

ア：「ちよつと待て！フラグってなんだ！フラグって！」

ド。クエのレベルアップのような効果音と共に無駄な能力が上がったようだ

正直、フラグはいらねえ

神：「な…神様とのらぶらぶ甘ん生活がしたくないの！？」

ア：「神との時点で無理な気が…」

神：「うう…これでもだめ…？」

ア：「…っ」

上目遣いは卑怯だ…たしかに美少女と呼ばれるに相応しい見た目で言われれば…

ア：「だが断る」

神：「な、ひどいよぉ」

…やばい…癒される…そしていじりがいがある

アレンのS度はry上がった

アレンのツツコミはry上がった

アレンと神様の仲が10上がった

ア：「既に数値じゃないだと…しかも仲が上がったのか…？」
神：「これならどう…？」

振り向き様に神様の谷間に顔を押し付けられた

…

…

…

ア：「さて…状況を整理しよう」

現在、神様に腕を抱きつかれている俺がいる
なぜこうなったかは察してくれ…

ア：「俺は裏切りのせいで死にそうになったところを俺の事を想っていたお前が助け、毎日抱きついていたと…かなり無理があるな」

神：「いいじゃんそのくらい…むきゅ…」

随分と楽しそうだな…

ア：「だが…俺にはやることがある、いつまでもここにいる事は出来ない」

神：「…」

…だから…上目遣いは反則だ…

ア：「…たまには来てやるから…」

神：「…絶対だよ？」

ア：「！？」

神様の攻撃力が100上がった

神様の色気が1上がった

神様の悩殺力がマックスまで上がった

神様のかわいさが100上がった
神様のry

ア：「いつまで続ける気だ！」

『だって楽しいし』

ア：「……」

『グシャボキグチャ』

今俺は巨大な穴の側に来ている
理由は簡単、現世に戻るための出入口だからだ
さっきの音？まあ気にするな

神：「はい」

再び、現世へと行こうとする俺に何かを渡す神様

ア：「なんだこの紙？」

神：「私のスリーサイズ……きゃ……／／／／／」

ア：「……」

神：「あ、破らないで！というか、そんなに全力で否定しないでよ
く……！」

アランには早すぎたようですね（笑）

ア：「……殺す……」

……そんな物騒な……

神：「それは神専用の通信機だよ、毎日電話するからね？」

ア：「気が向いたら受けてやる」

神様が文句らしきものを発するのを背中に聞きながら、俺は再び現

世へと飛び出した

もちろん、死んだからこそ新しい世界で新しいこと始めるために

足りない…足りない…足りない…

もっと…もっと…もっと…

俺にはもっと…必要だ…

絶望に染まる黒き血が…

第二話 もう1つの始まり（後書き）

キャラが暴走した感が否めません（笑）

もっとシリアスな雰囲気を出すつもりだったのに…

しかし後悔はしてない…はず↑

感想、誤字脱字等ありましたらよろしく願いします！

第三話 新たな世界と始めての戦い

ヒューーーーーーグシャ

【???】

いてて…まさかほんとに空から落ちるとはな…
というか、よく無事だな俺

見るからに平地…じゃなく目の前には森、左にも森、右にも森、後ろには沼…

…まあ、俺の力さえあれば問題な…? 若い?

鏡…はないから沼で確認…ってなんじゃと!

若い! いや、23だったから前も若いんだが…どうみても17ぐらい…まさか…

ピリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリ

ア:「うぜえ!」

神:「ひどい! せっかく愛しの私が掛けたのn…って電話を壊そうとするな!」

ア:「…ちつ、で、何のようだよ?」

神:「ん? 新しい世界に旅立つ貴方のためにオプションで若返らしてみました♪」

ア：「…前の力や剣はどうした」

神：「剣はこつちにきた時に自動的に処分されちゃったよ？」

ア：「元に戻せ！」

神：「ム・リ」

ア：「…」

神：「あ！だから電話を壊そうとしないで！オプションはまだあるから！」

ア：「…どうしようもなかったら壊すからな…で、何がいたんだ？」

神：「世界最強の力」

ア：「…壊していいか？」

神：「だ・か・ら壊さないで…！嘘じゃないし、試してから言ってみよう！」

ア：「そもそも力ついていわれてもわかりずらいんだけど？」

神：「ん」と…殴る力とか蹴る力とか魔法を使う力とかだよ？」

ア：「なるほど、殴る蹴る魔法と…って何！？魔法だ！？何だそれは！？」

神：「耳元で叫ばないで…そうだよ魔法だよ？あ、貴方の世界に魔法なんて概念なかったね」

ア：「ああ…詳しく教えてくれ」

神：「魔法って言うのは…日本では『魔法』とは、それらの神秘的で超自然的な力または行為の中でも、特に西洋由来のものを指す言葉としてよく使われる。これは元々魔法という語が明治以降に外国語の訳語として作られた新しい言葉であることが大きい。(by wikipedia)らしいよ？剣や槍みたいに近距離で戦わずに遠距離で巨大な火力を得られるよ」けど、素質が全てを左右するから剣槍等で戦った方が強い人もいるけどね」

ア：「…二ホンとかセイヨウとかわからない言葉があるし『らしい』とか不確定要素がたくさんあるが、気みたいなものなのか？」

神：「そんな感じに捉えればいいよ」あ、発動する時は使いたい

魔法の言霊を唱えればいいよ」

ア：「なるほど…試したいがどこにやればいいんだ？空か？」

神：「ん〜ん〜後ろ見て、後ろ〜！」

ア：「あ？さつき沼しかなかっただ」

『gyaaaaaaa!』

：

ア：「…死なないよな？そもそも竜種かよ…」

神：「強さは竜種の中で一番下の火竜、通称『ファイアドラゴン』

体色が性格を表していて火竜は竜種の中で一番強暴だよ」

ア：「火竜か…なつかしいな…なんて唱えればいいんだ？」

神：「え〜と…何がやってみたい？」

ア：「…雷系のやつを頼みたい」

神：「簡単な『雷撃』をやってみれば？」

ア：「把握した、では・・・雷撃!!」

ピシャツ『gyaaaaaaa…』プスプス…

ア：「おお…竜種が一撃で倒せるとは…俺でも半日かかったのに」

神：「…普通の魔法使いでも竜種は一人だと倒せないんだけど…熟

練者なら倒せるとは思っけど…」

ア：「そうなのか？まあ倒せるだけの力があるということとはわかつ

たから問題ない」

さて、見るも無残になった火竜の死体を片付けるか…

神：「さて、用意はいい？」

ア：「ああ、問題ない」

あの後、神に頼んで適度な服装と剣を貰った

実験をやるために小さな森を作ったようで、少し歩けば街らしい

神：「じゃ、がんばってね？愛してるからね？」

ア：「楽しんでくるよ」

さあ、新たな冒険の始まりだ！

電話から泣き声が聞こえるが無視無視

【??.?】

くっくくくっ
…

そっだ…俺は…最強だ…

俺が最強だ！ひゃーはっはっは！

第三話 新たな世界と初めての戦い（後書き）

今回でエレンと合流させようかと思いましたが無理でしたorz
難しいもんですね…

感想、誤字脱字がありましたらよろしくお願いします

第四話 出会い（前書き）

細々更新していきます

週二で更新できればいいかな…？

第四話 出会い

【森】

ふう…歩いてすぐだと…？

…一日歩き続けて出られない距離はすぐとは言わないのではないだろうか！？

くそっ…水は川か魔法で出した（不味い）やつでしのげるが、食料だけはな…。

バックに入ってるのは最初に倒した火竜の食べれる部分（腹とか尻尾とかだな）と解体中に見つけたよくわからん石に途中で見つけたうさぎみたいな魔物1匹か…。

…早く出られないと飢え死にだな。

…迷路かよ…。

最初の沼まで戻ってきてしまった…なら迷わずにすぐ出られる道が右か左にあると見て間違いないだろう。
まずは右に…………。

1時間後

…違うらしいな、最初の場所だ。
次は左か。

1時間後

…違うだと…まさか、あいつの嫌がらせか…？
…まさかな…ははは…まさか沼が正解とかいうオチはないよな…
…自分で言ってて正解に思えるのは気のせいだろ。
だがまあ、行くしかないよな…はあ…

5分後

紛らわしい出口だったな…あいつに次に会ったらタコ殴りだな。
さて、水平線に見える城みたいのが街かな？
セオリーどおりなら日没ぐらいには門が閉まるからな…急がないと。

一日森の中だったから今は昼だけど

【聖グランベリア学園】

エ：「ふう、今日も疲れたわ」

？：「まあ、闘技学あつたしね」

エ：「あれ？いたの？メシア」

メ：「ひどいよお」

彼女はメシア「デユラハ。

かれこれ5年ぐらいの付き合いです。

最初はただのバカだと思ったんですが、これがなかなかのバカで…

メ：「バカバカうるさい」

エ：「あれ？私、声に出してた？」

メ：「出してたよ！ひどくない！？親友である私にバカとか？」

？：「本当のことだから仕方ないでしょ、メシア」

メ：「うぐ…あんただけには言われたくない！」

？：「な、俺は学年でもトップ5には入るわ！」

メ：「あんたは性格が最悪なのよ！バカバカケルト！」

ケ：「うつさいわ！最下位のメシア！」

エ：「まあまあ…2人とも落ち着いて…」

彼はケルト「ジョシユア。

成績優秀な反面、体術と性格において最悪な一面を持つ美男子。
それが災いして彼女は未だ0とか。

楽しそうですが、毎回ケルトがボロボロで帰るのを見ると…

え？闘技学ですか？ああ、説明できませんでしたね。

闘技学とは魔法学と体術学を合わせたような…より実戦に近い形で
の戦闘訓練です。

普段は先生が呼び出した低級魔物を相手に戦い、たまにパーティを
組んで中級や上級魔物と戦ってます。

ところで私たちがいる魔法部。

基本は魔法関係のことをしていれば問題ないクラブなのでみんな自
由気ままにやってます。

しかし、遅刻や欠席には厳しい部長なので遅れると…

？：「貴様！我らが神聖なクラブに遅れてくるとはいい度胸だな！

？そこに直れ！成敗してくれるわ！！」

？：「いやあああああ…」

メ：「本日も哀れな子羊が1匹…つと」

エ：「何書いてるの？」

メ：「副部長に頼まれた出席簿だよ」

副部長：「悪いね。僕らは彼女を止めるのに必死だから書けなくて
ね…」

メ：「いえいえ、気にしないで下さい！」

部長：「ふう…さて、各自終了時刻まで解散！」

メ：「部長は相変わらず強いし綺麗だし羨ましいなあ…」

エ：「そうね…さすが学園最強の魔法使いだよね」

部長である彼女はリセル「カーラー」。

私の姉です。

ここまでパーフェクトな姉を持つと色々大変です…唯一勝てるの
は持つてる鬼神石ぐらいだと思います。

…言って悲しくなりますけど、仕方ないことですよね…

リ：「はい、今日のクラブ活動はここまで！各自解散していいよ！」

メ：「このあとどうする？」

エ：「ん…買い物に行きたいかな？魔法紙を買い足しておきたいし」

メ：「あゝ私も足りなかった気がするな…うん、行こっか！」

【ラグナ中央商店街】

メ：「これとあれと…あとそつちも」

エ：「…買いすぎじゃない？」

メ：「たまにしか来ないから部屋に置いておこうかと」

エ：「…はあ…」

現在、私たちは魔法紙を買った後、お菓子屋に来ています。
理由は見てわかるとおり…

メ：「幸せ…」

と、幸せいっぱい顔をしているメシアが大好きだからです。

エ：「そろそろ帰らないと遅くなるよ？メシアは寮でしょ？」

メ：「うう…たしかに怒られるのヤダなあ…」

学園には遠くからの入学生のために寮があります。

私は家が近いのですがメシアやケルトは遠方から来てるので寮に入ってます。

そうそう、姉は夜遅くまで学園に残ることもあるので寮にいます。最近になって寮に入りたいと思う私ですが、来年からは希望者も入れるようになるので楽しみです♪

？：「君？ちよつといいかい？」

エ：「はい？何ですか？」

買い物からメシアと帰る途中、見知らぬ人に声をかけられました。見た感じ旅人で、マントに隠れてよくはわかりませんが、服装は綺麗で、顔を見る限り私たちと同じくらいの年に見えます。

そして…ケルトも美男子なんですが、彼が霞む位、目の前の方はどうもかっこいいです…ここまでかっこいい人は初めて見ました！

でも…今まで見た人とは雰囲気が違う気がしますね…隠れて見にくいですが、黒い目に黒い髪に見える気がします。

？：「この街の魔法学校に行きたいんだが…どう行けばいいか教えて欲しいのだが」

？：学園の行き方？遠くから来た方でしょうか？

メ：「聖グランベリア学園ですか？案内しましょうか？」

？：「ああ、頼まれてくれるか？」

メ：「いいですよ！ね、いいでしょエリン？」

エ：「え？ええ、いいよ？」

メ：「やばい！やばいぐらいかつこいいよ！ねえ！エリンもそう思わない！？」

エ：「…たしかにかつこいいけど…」

メ：「？どうかしたの？」

エ：「…ううん、なんでもないわ」

メ：「？あ、ここです！えつと…」

？：「…ああ、自己紹介がまだだったな。俺の名はアランだ」

メ：「私の名前はメシア」デユラハです！」

エ：「私はエリン」カーラーといいます」

ア：「メシアとエリンか。案内ありがとう。ここから先はがんばって探してみるよ」

メ：「大丈夫ですか？最後まで案内しますよ？」

ア：「いや、大丈夫だよ。では、また会おう」

メ：「はい！さようなら！」

エ：「あつさようなら…」

行っちゃいました…不思議な方です。

メ：「ハア…かつこよかったなあ…また会いたいなあ…会えるかなあ？」

エ：「さあ？縁があればじゃない？」

メ：「そうだよ…でもあれだけかつこいい人見たら他の人とは付き合えないよね…」

エ：「それは言っちゃだめ…（苦笑）」

【聖グランベリア学園】

ここが学長室か…広すぎるだろ…勤務先の防衛施設より広いぞ…。
あつ、”元”か。

少し緊張するが…問題ないだろ。

コンコン

学長：「どうぞ」

ア：「失礼する」

学長：「失礼するなら帰りなさい」

ア：「それはすまなかった。では…なんて言うか！」

学長：「ノリツツコミをありがとう。で、用件は何だね？見たところこの近辺では見かけない顔だが」

ア：「…」

俺は何も言わずに一枚の封筒を渡した。

学長：「？誰からかな？」

5分後

学長：「なるほど。事情はわかった。部屋は寮に行けばわかる」

ア：「ありがとうございます」

学長：「礼には及ばない。両親をなくし、たった1人で此処まで来たというのは辛かっただろうに…。しかし…かの有名なバロスニア魔法学院に在学していたのならそのままいればよかったのではない

か？」

ア：「元々仲間外れになつていたのに加え、資金面での後ろ盾がないので…こちらに来れば親戚もいるので何とかありますし…ギルドが近いのも理由ですね。何より…まだ学び足りないのです」

学長：「良い心意気だ！教科書等は私が用意しておこう。学年は…2学年でよかつたかね？」

ア：「はい。よろしくおねがいます！」

学長：「よい返事だ。…ああ、忘れるところだつた。今から君の魔力値と属性を見るからこの水晶玉に手をかざしてくれないか？」

ア：「あ、わかりました」

学長：「な、なんということだ…こんな事が…」

ア：「何かあつたんですか？（どう考えても俺の力の異常さについてだよな）」

学長：「ああ…魔力とは最初は素質。次に育つた環境で決まるんだが…我々は量を大まかに分けてランクをつけているんだ。下がDで上がSだ」

ア：「（めんどい…）で、俺の結果は？バロスニアでは教えてもらえなかつたので…」

学長：「先に属性だが…君は学園史上初めて入学当初から全ての属性を使えるようだね。これだけでもすごいのだが…魔力に至っては数値が計測できない…つまりS以上の力があることがわかつた」

ア：「…誰にも言わないで下さいね？」

学長：「言つても信じてもらえそうにないだろうがな…よし、以上だ。寮の鍵は管理室で受け取るといい」

ア：「ありがとうございます」

ようやく…ようやく出発地点に辿り着いた…。

俺の物語は…ここから始まるんだ…！

…とりあえず…最低限の事項だけでも確認しておかないと…あのや
ろ…無茶苦茶書きやがって…。

さて、荷物の整理と武器の購入、図書室で基礎確認をしないとな。

第四話 出会い（後書き）

長かった…予定の数倍書きました。

どうかでキヤラ紹介しないとこんがらつてきそうです…

感想、誤字脱字等ありましたらよろしくお願いします！

第五話 聖ゲランベリア学園（前書き）

平日は忙しいですね…ほんと

第五話 聖格蘭ペリア学園

【寮】

…しまった…

…生活必需品やら武器やらを買おうにも金がなかったんだ……。

…最初だけあいつを頼るか、しかたないし。

まあ、たまには電話してやらないと面倒になりそうだしな。

ブルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルル……

神：「はいはい、今か今かと心待ちにしてたよ」

ア：「装備や生活に必要な品を揃える為の金をくれ」

神：「無視ですか！？私は貴方をそんな人に育てた覚えはありません……よよよ」

ア：「いいから早くくれ」

神：「むう、ノリが悪いなあ……私が直接あげれば良いんじゃないの？」

ア：「できるだけあんたに頼りたくない。それにここにはこの経済情勢があるからな。あんまり変な物を用意しても困る」

神：「…素直じゃない……にゅ……」

ア：「そついや、この世界の金の価値も教えてくれ。商店で見た感じでは金貨銀貨銅貨しかなかったが」

神：「…銅貨が100枚で銀貨、銀貨が100枚で金貨」

ア：「…一般市民の月収とかもわかるか？」

神：「大体銅貨1000枚」

ア：「…はあ…機嫌直せよ…あと魔法の属性は？属性間の強弱も教えてくれるとありがたい」

神：「火水木雷土光闇無の8つ。強弱は火↓水↓木↓雷↓土↓火↓

…で光 闇、さらに無は他の属性に影響されない」

ア：「へえ。なかなかおもしろいな。…ああ、あと今度抱きつくこ

とぐらいは許してやるからそれで勘弁してくれ」

神：「！！えへへ…楽しみに待つてるから早く来てね？」

ア：「…はいよ。あとは…この世界の地理とか常識とか最近の情勢なんかを教えてくれ」

神：「地理か…とりあえず、この世界は6つの大陸と島国があつて、それぞれ気候に合わせた独自の文化が築かれてるよ。あなたが今いるのがラスクタニア中央大陸ね。他の国や地域は追々調べてね」

あと常識に関しては、魔法は言霊が必要なのは教えたよね？貴方にはそれだけしか教えてないけど、本当は魔法を発動させるやり方にも2種類あるの。

1つが貴方に教えた言霊のみを発言する『無詠唱魔法』。そしてもう1つが、普通の魔法使いが使う『詠唱魔法』。両方言霊を発言して発動することには変わりはないんだけど大きな違いがあるの」

ア：「それは？」

神：「威力や範囲といった外面的な要素。要するに威力や範囲に関わる文を詠唱文というんだけど、それを詠み上げた後に言霊を発するのとただ言霊を発するのではかなり差が出るよ。

やっぱり、詠唱文が無い方が早く発動できるでしょ？だけど、その代わり威力が通常より劣るの。簡単な敵なら無詠唱でもいいけど、強い敵なら詠唱を詠んで発動するのが普通だよ。まあ、貴方なら無詠唱でも十分強いけど」

ア：「へえ。やっぱり俺は強いんだな」

神：「私という神の加護があるし、貴方自身が生まれ持つてきた魔力だもの」まあ、あんまり目立ちたくなかったら魔法を使う前に適当な文を呟いてからか、がんばって詠唱文を覚えて使った方がいいかもね？」

ア：「なるほど、よくわかったよ。」

神：「じゃ、とりあえず、金貨2枚銀貨10枚銅貨100枚ぐらい財布に入れて送っとくね」

ア：「ありがとな」

神：「がんばってね〜愛してるよ〜」

…最後は無視して構わないだろ。

さて、資金も調達できたし、着る物や装備や生活に必要な物を揃えないと……

いつまでもあるわけじゃないからどっかで任務が傭兵業で稼がないといけないし……

いや、ここが俺の世界の常識が当てはまるならなんらかの施設があるはずだ……

…まずは授業をこなして、週末にでも探しに行きたいな。

ふう、いろいろ必要な物を買ってると結構な量になったな。

教科書はいつの間にか部屋の机に置いてあるし。

…まずは雰囲気慣れること、そして必要以上に目立たないことが楽しい学生生活を送る上で重要だな。

ちゃんと考えてやらないと俺が最強なことがバレちゃうし、気をつけないと……。

…もうこんな時間か。

今日は遅いし、寝るか。

【聖グランベリア学園 2・S教室】

ケ：「おはよう」

メ：「おはよう。遅かったね？」

ケ：「仕方ないだろ？クラブのせいで体のあちこちに痛みが残ってるからな」

エ：「お疲れ様です。治癒魔法はやりましたか？」

ケ：「ん……俺、治癒系は苦手だからな……」

メ：「え！？やってないの？バツカじゃないの？」

ケ：「な、うるさい！ならお前はできるのかよ！」

メ：「ふふん。見てなさいよ！」

……

ケ：「おお……」

エ：「メシアは治癒系は得意だね。治癒系の家系だし」

メ：「小さい頃から他の攻撃魔法より先に覚えさせられたからねえ」
「……そのせいで今じゃ、攻撃系は全然ダメだし……」

ケ：「メシア」

メ：「ん？何？」

ケ：「……ありがとう」

メ：「どういたしまして。あんまり無茶したらだめだよ？」

ケ：「……おそらく善処する」

メ：「おそらく！？せめて私の目を見ながら言いなさいよ！」

エ：「……（素直じゃないんだから……はあ……お似合いなのに……）」

ケ：「はあはあ……ああ、そういえば聞いたか？噂じゃこのクラスに転入生が来るらしいぜ？」

メ：「！男！？女！？」

ケ：「……聞いた話では男らしいよ？」

メ：「！！かつこいいかなあ……」

エ：「……節操無いなあ……」

ケ：「まあ、今に始まったことじゃないし」

エ：「でも暴走すると止めるの大変だし……」

ケ：「……（チラッ）！！」

メ：「……あん。だめだって、こんな場所でs」「やめろ！（やめなさい！）」「へぶっ」

ドサッ

エ：「ふう……でも珍しいよね。こんな時期にこのクラスに転入生なんて」

ケ：「そもそも転入生自体がないからな。でも、このクラスにってことはそいつも優秀なんだろうな」

エ：「どんな人かしらね？」

ケ：「さあな。金で入ってきたボンクラ貴族の坊ちゃんじゃないことを祈るよ」

エ：「……（そういえば、あの人は何だったんだろう？もしかしたら転入生って……）」

ケ：「？どうかしたのか？」

エ：「え？何でもないよ？あ！ほら、先生が来たみたい」

ケ：「ほんとだ。おい、メシア起きろよ」

メ：「にゅ……おはよう……」

先生：「みんな、おはよう！……よし、全員居るな。まずは連絡事項からだ。最近、街周辺にレッドウルフやゴブリンがうろつくことが多くなってきた。直接は君達に関係はしないかもしれないが十分注意するように！」

次に、来週のギルドパーティーについてだが、当日はギルドに編成書をすぐ提出してクエストに向かってほしいから早めにメンバーを決めておくように！編成書は私のところまで取りに来なさい！わかっていると思うが人数は2〜4人までだからな！

さて、最後に君達に一番の話題だ！「知っている人は知っているとと思うが、今日、このクラスに転入生が加わることとなった！」

…男かしら？女かしら？

…女だといいなあ…

かつこいい人だといいなあ…

…そういえば、私、それらしき人見たよ！

ええ！男！？女！？

先生：「静かに！…さあ、入ってきてくれ！」

ガララッ

エ：「えっ…あの人は……」

メ：「あの人は……！」

先生：「メシア！うるさいぞ！…では、自己紹介をしてくれ」

ア：「初めまして。アラン＝クリアフォードといいます。新しい場所で慣れないことがたくさんあると思いますが、よろしくお願いします」

生徒A：「キヤーかつこよすぎる！」

生徒B：「惚れそうだわ…／＼／＼／＼／」

先生：「よし、アラン君の場所は…エリンの隣でいいな。エリン！頼んだぞ！」

エ：「あ、はい。わかりました！」

ア：「お久しぶりです。一緒のクラスになれるとは思いませんでした。よろしくお願いします」

エ：「こちらこそ、よろしくお願いします。わからないことがあれば、聞いてくださいね」

メ：「アランさんがこの前、学園の場所を聞いたのは転入するためだったんですね？」

ア：「うん。こっちには来たばかりでね。」

ケ：「あれ？知り合いなのか？」

エ：「この前、ケルトが先輩に捕まった後に買い物に行ったんだけど、そこで会ったの」

ケ：「へえ。俺はケルト＝ジョシユア。よろしくな、アラン」

ア：「こちらこそ、よろしくお願いします」

ケ：「固いなあ。もつと気楽にしていぜ？お前となら良い仲間になれそうだし。何よりエリンやメシアの友達みたいだしな！」
ア：「……ああ、助かる。どうも敬語は堅苦しくて嫌なんだ。改めてよろしくな」

ケ：「ああ！……さて、次は魔法学だから行こうぜ！……つとアランはまだ場所はわからないよな。一緒に行こうぜ！」

ア：「助かるよ。持ち物は……何を持っていけばいいんだ？」

エ：「発動補助の道具があればそれをもっていくだけでいいよ。私たちは、みんな指輪なんだけど、アラン君は何を持ってるの？」

ア：「……これだよ」

メ：「へえ、珍しいね？ガントレットが媒体なんて」

エ・ケ：「（間にはつつこまないのか）」

ア：「早く行こうぜ。授業に遅れるのはまずいだろ」

【魔法学】

先生：「始めるぞ。今日は詠唱についてだ。」

「先生！今さら詠唱についてなんて必要ありません！」

周りを見ると頷く者、そうだそうだと声をあげる者、寝てる者……
つて、もう寝てるのか

先生：「静かに。たしかにただの詠唱についてなら学園に入る前から教わるだろう。しかし、今回教えるのは威力や範囲を変える詠唱『付加詠唱』についてだ」

おお、周りが静かになった。

俺はあいつから教わったから何とも思わないが、他の反応を見ると違うらしい。

……いや、エリン、ケルトの表情は変わらないな。

メシアは寝ている。

先生：「威力や範囲を変えるのは簡単だ。その意味を含んだ詠唱を唱えればよい。例えば…巻きつけ、ライトボール」

そついうと先生の手から放たれた光の球がメシアの周りを飛びながら当たり続けている。

メ：「痛い！痛いよ！止めて〜！」

先生：「メシア。嫌なら寝ないようにすることだ。…と、このように普段、諸君らも使っている基本詠唱ではなく、自分に合った言葉で唱えるとよい。しかし気をつけよ。付加詠唱を唱えた場合、程度に応じて使用する魔力も増減する。このことを覚えておくように。では次は……」

先生：「……というわけだ。以上で講義は終わる。次は、訓練場にて各自試し打ちをし、違いや自分に合った言葉を見つけるとよい。解散」

エ：「メシア。行きますよ」

メ：「うん。またあの魔法をくらうの嫌だもん」

ケ：「寝なきやいいだろ」

ア：「その通りだ」

メ：「みんなひどい〜!!」

【訓練場】

ケ：「アラン！組もうぜ！」

ア：「ああ」

メ：「ねえエリン。やる前に2人の戦いを見てからにしない？」

エ：「うん、いいよ」

ケ：「いくぞ！まずは…燃え上がれ！炎撃！」

ア：「威力増強か…護れ、水流壁」

ケ：「水の壁か！しかも、なかなかの強さだな！（…そういや、アランの強さ知らなかったな）」

ア：「次はこつちだ。轟け、雷撃！」

ケ：「雷か！ならば、燃え立て！火柱！」

ア：「無駄だ！無数に分かれ敵を粉碎しろ、砂連弾！」

ケ：「！！数が多すぎる！護れ！炎陣壁！」

ア：「ちつ、やっぱやるな……」

ケ：「アランこそ。それでも毎回学年上位には入ってるんだけどな」

エ：「いつもの通りケルトはすごいですね。しかし、アランさんも

…」

メ：「うん！引けを取ってないね！」

ア：「ふつ。次は試してみたいやつがあるからな」

ケ：「来い！返り討ちにしてみせるぜ！」

ア：「いくぞ。来たれ風の精霊よ、彼の者を切り刻め、風の刃！」

ケ：「な！ぐっ！」

アランの放った魔法がケルトを包む炎のバリアを切り刻むとボロボロになったケルトが現れた。

体には無数の切り傷が見える。

ケ：「いつてえ…！にしてもすごいな！今日教わったばかりでここまで使いこなすなんて。最後なんてかなり強かったし！」

ア：「最後は少し捻ればいくらでも考えれるけどな。」

ケ：「まあな。そういや、聞いてなかったけど得意属性はなんなの？俺は火なんだけどさ」

ア：「俺は雷だ」

エ：「私も言っておきますね。私は水です」

メ：「私は木だよ。他はあんまりだけど……」

ア：「なんだ見てたのか。終わったのか？」

エ：「うん。見学してたの。参考にもなるし」

ケ：「メシアが…だろ？」

メ：「わ、私だって考えれるよ！」

ケ：「ほんとかよ。」

メ：「な、見てなさいよ！エリン！やるわよ！」

エ：「うん。ではやるので離れてくださいね」

ア：「2人ともがんばれよ」

そついうとアランとケルトは脇にあるいすに座った。

メ：「いくよ！打ち砕け！木弾！」

エ：「水よ、大地を満たし、私を包め！水流蒼壁！」

ア：「ちょ…これまずくね？他が水浸しになる気がするんだが」

ケ：「いや、大丈夫だよ」

ケルトから返答を得たアランが前を見るとそこには水がある場所からこちらに来ないようになっていた。

ア：「魔法壁か？」

ケ：「ああ。かなり強力なやつらしくて、大抵のことじゃ壊せないらしい」

ア：「へえ。おつ、次はエリンが仕掛けるみたいだな」

エ：「敵を撃ち抜け！氷撃槍！」

エリンがそう唱えると見る見るうちに水浸しとなった舞台から槍の形をした水が固まり氷と化してゆく

メ：「私だって…私だってやればできる！奮えたて大地よ神秘の森よ！我を守護せよ！！森の守護者！！」

ケ：「！ガーディアンか！」

ア：「？すごいのか？」

メ：「いや、この魔法自体は中級なんだけど、メシアはいままで不完全にしか発動できなかったんだ。まあ、中級といっても召喚魔法の難易度は中々なもんだけどな」

ア：「そうなのか」

氷の槍がメシアに向けて飛んでいくと水浸しの舞台の中から鎧をま

とつた守護者が現れ、氷の槍は碎けて消えていった

メ：「さらにいくよ！風の精霊よ！何人たりとも防げぬ風の刃で全てを断ち切れ！断人風凱！」

エ：「！！水の精霊よ！我誓う！其の力、大切なものを守るために！永久氷壁！さらに氷刃！」

メ：「ちよつ！それ上kきやあああああああ！」

ア：「最後はなかなかの見応えだったな」

ケ：「2人ともかなりの魔力を使ってたからな。特にエリンのは上級魔法だったし」

エ：「メシア、大丈夫？」

メ：「これくらい大丈夫だよ。それよりアランさん！私どうでしたか！？」

ア：「え？あ、ああ、よかったと思うぞ？」

メ：「やった！」

ア：「？」

エ・ケ：「（アランって…恋愛とかに関しては疎いのか？）」「

先生：「…そこまでだ。各自解散していいぞ」

ケ：「次は魔法生物学だっけ？」

メ：「そうだよ」

メ：「やっと授業終わった〜！」

エ：「さ、帰りましょ。」

ケ：「この後どうする？」

ア：「俺はやることはないな」

メ：「じゃあ面白い物行かない？」

ケ：「いいぜ。エリンは？」

エ：「いいよ」

ア：「じゃ、買い物に行くか」

【ラグナ商店街】

ア：「で、メシアはどこに行きたかったんだ？」

メ：「武器屋だよ。来週はクエストだししっかりと準備しておかないと！」

ケ：「メシアがクエストのこと考えてたなんて……明日は雷か？」

メ：「ちよっ、ひどい！」

エ：「でも用意はしておかないとね」

ア：「そっういや、みんなはどんな武器を使ってるんだ？」

ケ：「俺は槍」

エ：「私は銃と短刀を」

メ：「私は大剣だよ！」

ア：「メシアは見かけによらず力があるんだな」

ケ：「俺らも最初見た時は驚いたよ」

エ：「頼もしいけどね」

ケ：「で、アランは？」

ア：「俺は剣だ」

エ：「では、ここに集合ということでもいいですか？」

ア・ケ・メ：「「「ああ！（はい！）」「」」

エ：「そろそろ帰りましょうか」
ア：「ああ。なかなか面白かった」
ケ：「世界に誇れる商業国家の首都だしな。生半可な量じゃないぜ」
メ：「お菓子屋がたくさんあるから幸せだよ」
エ：「メシア：少しは抑えましょうよ……」
メ：「♪」
ア：「……だめだ、聞いちゃいないな」
ケ：「ああ。じゃ、バカはほっというて帰るか」
メ：「♪♪……………あ！置いていかないで〜！」

【寮】

ふう……今日は疲れたな。
昨日会ったエリンやメシアのほかにケルトと友達になれたのは良い収穫だな。
……友達か……
俺ら軍人に友達なんてものは存在しなかったからな……
あるのは……敵か味方か……ただ……それだけ……
そっぴや、色々調べた魔法を使ってみたが、楽しかったな。
明日も楽しめるといいな……

そっと思つてアランは目をつむり、夢へと落ちていった。

第五話 聖ゲランベリア学園（後書き）

そろそろ登場人物とか魔法について書こうかな…

感想、誤字脱字があればよろしくおねがいします！

番外編 人物紹介、世界観等（前書き）

少しは整理しないと…

自分が忘れそうです（あ

すでに家名とかは忘れてますが

番外編 人物紹介、世界観等

アラン「?????」（学園ではアラン「クリアフォード」）

性別：男

髪：黒色

目：黒色

顔：メシア談「やばいです！」アラン談「普通だと思っぞ？」

使用武器：剣

得意魔法属性：全て（雷）

一言「よろしくな」

エリン「カーラー」

性別：女

髪：澄んだ水色

目：藍色

顔：ケルト談「学園で5指に入るな」エリン談「みなさん褒めすぎです……」

使用武器：銃、短剣

得意魔法属性：水

一言「みなさん、よろしくお願いします」

メシア「デュラハ

性別：女

髪：金色

目：灰色

顔：アラン談「整った顔だな」メシア談「自信はありますよ!」

使用武器：大剣

得意魔法属性：木（治癒なら全般）

一言「治癒系なら任せてください!」

ケルト「ジョシュア

性別：男

髪：銀色

目：茶色

顔：エリン談「街に行くと女の人によく声を掛けられてますね」ケルト談「アランには負けるぜ」

使用武器：槍

得意魔法属性：火

一言「槍って強いんだぜ!」

ラグナ

ラスクタニア中央大陸の火王が治める国の首都

人口500万人が住む世界でも有数の都市

近くから鬼神石が採れる唯一の街

世界の中央に位置するため多くの大陸から旅人が来る商業都市

聖グランベリア学園

大陸の首都ラグナにある魔法学園

生徒数：第1学年から第5学年まであり、1学年500人ぐらい

先生数：100人ぐらい、全員ギルドランクB以上（これが採用最低条件）

教科：魔法学、魔法薬学、体術学、闘技学、得物学、魔法生物学、

魔法戦闘学、属性魔法学等

広さ：名古屋ぐらい

巨大な寮もあるため遠くから来た生徒もいる

ギルド

世界中にある公共施設

民間・軍よりクエストを依頼され、利用者に情報を提供する

基本は1階が酒場・食堂、2階がクエスト受注・クエスト完了報告

所、3階以降がギルドランクB以上の人・パーティに与えられる部屋。

ギルドランクはSからGまであり、普通の学生ならG〜E程度。B以上が軍に入る資格を持つようになる。Sランクになるとギルドマスターより異名を与えられる、もしくは自分で考える。

依頼内容は魔物討伐から護衛、搜索等様々な種類がある

魔法

属性：火水木雷土光闇無の8属性

強弱：火↓水↓木↓雷↓土↓火↓…、光 闇、無は他の属性に影響されない代わりに独自性に富んだタイプの魔法が多い

普通の人なら2種類。稀に3種類。王族や帝と呼ばれる人たちは何種類もの属性を扱える。アランは例外。低級魔法と中級魔法は訓練さえすれば、全属性使うことができる（威力は適正者に比べいくらか劣る）。上級魔法以上は適性がないと使うことができない。

使用方法：詠唱文と言霊の組み合わせにより発動する

例：「燃えろ！炎撃！」火属性の低級魔法。目の前に火の球を発生させ、前に飛ばすことができる

例：「焼き尽くせ！炎撃！」火属性の低級魔法『炎撃』を付加詠唱『焼き尽くせ』により、広範囲に攻撃すること

例：「深淵の闇より偉大な魔王ガルダロスよ、汝の大いなる力の一部を我に与えたまえ。大いなる力の元、眼前に立ち尽くす彼の者を地獄の闇に陥れよ！冥界の闇！」この場合、闇の上級魔法『冥界の闇』で攻撃すること

付加詠唱：通常詠唱に様々な効力を付加させる詠唱文。威力や範囲が大きくなる代わり魔力を多く消費する。

無詠唱：詠唱を唱えず、言霊のみで発動する魔法。威力が通常より劣る。

種類：通常魔法、召喚魔法、古代魔法、特異魔法、暗黒魔法、禁魔法、神魔法等

難易度：低級↓中級↓上級↓最上級↓究極

第六話 バトルバトルバトル！（前書き）

更新が大幅に遅れそうです…

週一で更新できなかったらごめんなさい

第六話 バトルバトルバトル！

【寮】

ん…もう朝か。

入学から早1週間。

いろんな授業をやったが、闘技学は楽しかった。

まあ、どこにでもいるいじめっ子をボコボコにただけだが。

は？そいつの実力？

他の3人の戦い方？

やだよ、めんどくさいなあ……

『見せてやれよ』

何でだよ、お前が見せれば良いだろ？さく

『出番減らすよ？』

……ハイ、ワカリマシタ。

回想中

ア：「さて、今日も最後の授業だな。最後は何の授業なんだ？」

エ：「最後は闘技学だよ」

ケ：「そうか！今日は闘技学があつたか！」

ア：「闘技学ってなんだ？」

エ：「なんでもありの実践練習だよ。魔法、武器、召喚魔とかかな。

まだみんな、召喚魔を持ってないと思うから今は魔法と武器だけだね」

ア：「召喚魔か。ドラゴンとかか？」

ケ：「ドラゴンなんて召喚したらそれだけで有名人だぜ？まあ、上級生で有名な人はみんな上級魔物や精霊と契約してるけどな」

エ：「召喚魔は一種のステータスだからね」

ア：「ふーん…」

メ：「はあ…今日は勝てるかなあ……」

ア：「ん？勝つたらしいことがあるのか？」

エ：「とりあえず、成績の判断材料にはなると思いますよ？」

ケ：「そうそう。まずは勝たないと。…ああ！そうだ、アラン！スミスに当たったら気をつけるよ！」

ア：「なんでだ？」

メ：「貴族の出身で平民を蔑ろにするだけでなく、実践を良いことに弱い者いじめをする最低なやつよ！」

ア：「…なるほど。転入生の俺は実力がわからないから狙われる確率が高いわけか」

…こんなこと言っているとほんとに当たるから嫌なんだよな…

アランのフラグが1立った（タラタッタッタ）

…なんだろう…またドラ。エの音楽が聞こえた気が。

エ：「気を付けてくださいね…？」

ア：「まあ、それなりにがんばるよ…ちょっと待て、怪我とかしたらどうするんだ？」

ケ：「闘技場には結界が張ってあるから死にさえしなければ結界から出れば治るよ」

ア：「…やっぱ便利だな…魔法って…」

先生：「始めるぞ。まずは…」

先生：「次、ケルト」ジョシユア対生徒C」

ケ：「俺の番か」

エ：「がんばってくださいね」

メ：「負けたら承知しないんだから！」

ケ：「ははっ。負けないさ！」

先生：「開始！」

生徒C：「先手必勝だ！黒弾！」

会場を1つの闇の球が走る！

しかし、ケルトはあわてた様子を見せず

ケ：「我が身に抱くは怒りの力！紅蓮の鎧！」

生徒C：「ちっ、火には水だ！水の矢！」

メ：「終わったね」

エ：「ええ」

ア：「紅蓮の鎧…たしか低級魔法だったよな？相性から言えばケルトに分が悪そうに見えるんだが…」

エ：「見てればわかりますよ」

ダダダダダダダッ

ケルトの火の鎧に生徒Cの水の矢が襲いかかるが、1つ目が当たると同時に鎧から霧が生まれる。

生徒C：「な、急に周りが…うっ」

ドサッ

ケ：「悪いな、俺の勝ちだ」

霧が晴れるとそこには床に倒れている生徒Cと無傷のケルトがいた。

先生：「勝者、ケルト」ジョシユア！」

メ：「お疲れ！」

ア：「なるほど…。鎧に魔力を多めに使っておけば相性の差もカバーできるし、霧を発生させることで相手の視界も奪ったのか…」

ケ：「まあな。これぐらい余裕だ」

エ：「次は誰でしょうか？」

先生：「次、エリン⇨カーラー対メシア⇨デユラハ」

メ：「エ、エリンと……」

エ：「お互い頑張りましょう！」

先生：「開始！」

さっきの試合とは違い、お互い1歩も動かない。

メ：「（まともに戦ったら私は勝てない。予想外の攻撃で余裕をなくし、奇襲で勝つ！）」

エ：「（この前は守護者が成功したから少し驚いちゃったけど、今回は問題ない。それに……）」

チラツとアランに視線を向ける

メ：「よそ見してる暇なんて与えない！母なる大地よ！大いなる力と化して敵を沈めよ！アースクエイク！」

ケ：「いきなり中級かよ！」

ア：「まずは体勢を崩す作戦か……」

エ：「くっ……地震で身動きが……なら……海の魔精リヴァイアサンよ！怒りとともに猛狂い、海面に煌めく波となれ！激流大津波！」

メ：「！」

生徒A：「すごい！水の中級の中でも上位の魔法を扱えるなんて！」

生徒B：「さすがエリン様！」

ア：「……あれで中級なのか……？それに……親衛隊か？」

ケ：「勝手に作ってる……やつだな」

メ：「雷陣壁！さらに雷撃！」

エリンの繰り出す会場全体を覆う大津波がメシアに襲いかかるとメシアは何を思ったのか雷撃を津波に向けてはなった

エ：「その威力だと私は感電しないよ？」

メ：「風よ、雷よ！冷たき息吹に身を任せ、鋭き雷の矛となり、汝、嵐の如く舞い誇り、風の盾となり我が身を護れ！嵐舞雷矛風盾！」

詠唱が終わると同時に大津波がメシアを襲うがメシアの周りは嵐のような竜巻が発生し、届いていなかった。

さらに津波を引き裂く勢いの雷の矛がエリンの近くに突き刺さり、

先に放ったはずの雷撃が今ごろエリンに当たる。

エ：「！くっ…雷より速い風なんて……」

ア：「うわっ、なんだ！？」

ケ：「知らないのか！？あれは融合魔法だよ！メシアのやつ、あんな技術を使えるようになってたなんて！」

…しばらくすると津波も嵐も収まり、服がボロボロの2人が姿を見せた。

傍から見てもボロボロなだけに、本人たちからすればかなりの疲労が溜まっているだろう。

先生：「そこまで。互いに素晴らしい戦いを見せてくれた！これ以上は互いの体が痛むだろう。ゆっくりと休むといい！」

ア：「お疲れ。はい、飲み物」

エ：「ありがとう。ん…疲れた……」

ケ：「特にメシアはすごかったな！いつの間に覚えたんだ！？」

メ：「この前の休みに家で魔術書を見つけたの。そこにやり方と詠唱文が載ってたから試したけど…疲れるね」

ケ：「そりゃ、中級魔法を2つ発動してるようなもんだからな。あんな終盤で使えば疲れるに決まってるだろ」

ア：「…融合魔法に下級はないのか？」

エ：「あるけど…使う魔力に対して戦果が得られないことが多いから…。簡単にまとめると、普通の下級より発動時間が遅くなるし、威力は中級に満たないの」

ケ：「逆に中級より上の融合は範囲も広いし、威力も申し分ないからいいんだけど、魔力消費が半端ないから熟練者じゃないと使いこなすのは難しんだ」

ア：「エリンやケルトは使えるのか？」

エ・ケ「もちろん」

メ：「どうせ私が使えこなせなかっただけですよーだ！」

先生：「次は…」

先生：「最後はアラン・クリアフォード対スミス・ケシユマロ」

ケ：「見事に当たったな。まあがんばれよ！」

ア：「はあ…適当にやって負けてくるよ」

エ・メ：「絶対勝ってください！（勝ちなさいよ！）」

ア：「う…まあ、ほどほどに頑張るよ」

ス：「君がアランとかいう人間かい？たしか今年転入してきたらしいねえ？」

ア：「まあな」

ス：「しつつかし、かの有名なバロスニア学院を辞めてまでこちらに来るとは…よほど落ちこぼれと見える！」

ア：「……（なんで裏設定を知ってるんだ？）ごたくはいいから始めないか？」

ス：「ふっ…落ちこぼれに私との力の差を見せてやろう！」

先生：「…開始」

ス：「我と契約し者よ！契約に従いその姿を現せ！」

そう唱えるとスミスの前に魔法陣が現れる。

その中心から光が溢れると次の瞬間、騎士が現れた。

ア：「…召喚魔か」

メ：「ずるい！まだみんな持ってないのを知ってるくせに！」

ス：「ふん！勝ちが全てなのさ！ゆけ！やつを捻りつぶせ！」

声を聞いた瞬間、召喚された騎士の瞳が赤く変わり、剣を振り上げながら突っ込んできた。

アランは冷静に体をずらし、後ろから思いつき蹴り飛ばした。

ア：「なんだ、そこまで速さがあるわけじゃないのか。動きも単純だし」

ス：「ふつ、僕の死霊騎士『ラインバルト』を甘く見ない方がいいぞ？」

そう言い放つとアランの後ろから何かが立ち上がる音が聞こえる。振り返るのは遅いと肌で感じたアランは横に跳ぶと、元居た場所の地面が抉れる。

ア：「…なかなかの力だな…」

ス：「それだけじゃないぞ！やれ！」

スミスが命令すると死霊騎士の周りに黒い剣が現れる。

無造作にスミスが手を振ると黒い剣がアランに向かって次々と放たれた。

ア：「自立型じゃないのか……いや、攻撃に関しては命令してないから半自立型か？」

ス：「何をブツブツと！いい加減あきらめたまえ！」

ア：「…雷撃」

ス：「はっ！今さら低級魔法を使って何になる！いけ、ラインバルト！奴を潰し、この戦いに幕を下ろせ！」

勝利を確信したスミスは死霊騎士に命令するが、死霊騎士は動こうとせず、その場に立ち尽くしていた……。

ス：「なぜだ！なぜ、動こうとしない！」

ア：「足元をよく見ろよ。」

ス：「足元……？……！！！」

ア：「気づいたみたいだな。今度はこちらから行くぞ」

アランはそう言い放つと、一気に距離を縮め、蹴り上げる。

あまりの速さに対応できなかったスミスはそのままアランの放つ蹴りを食らい、障壁に激突する。

そのまま壁に這いつくばり、先生が近づくと既に彼は気絶していた。

先生：「そこまで。勝者、アラン『クリアフォード』」

ケ：「やったぜ！」

メ：「ねえねえ、なんであのバカの召喚魔は動かなかったの？」

エ：「これを見てください」

エリンの手に小さな球が現れる。

エ：「さっきの試合の映像です。スミスの召喚魔の足元を見てください」

メ：「足元…？」

球の中の映像をメシアが覗き込むと、死霊騎士の足元に微かに光る糸のような物が見える。

メ：「なんか糸みたいなのが見えるけど……これが原因？」

エ：「はい。おそらく、アラン君は雷の力で足を縛りつけていたのではないのでしょうか？」

ア：「いや、違うよ」

いつの間に戻ってきたのか、後ろには涼しい顔をしたアランが居た。

エ：「お疲れ様です」

メ：「ねえ、違うってどういうこと？」

ア：「雷を利用してあれの足元に強力な磁界を発生させたんだ。一瞬しか見てないけど、あれの鎧は鉄だったし」

「……」

ア：「？どうしたんだ？みんな固まって…」

メ：「…だって…ねえ？」

ケ：「確かに雷には磁界を発生させる魔法があつたはずだ。だけど…」

ア：「だけど…なんだ？」

エ：「つまり、私たちが言いたいのは、完全無詠唱であれだけの磁界を発生させたことに驚いてるのです」

ア：「え？あれってそんなにすごかったのか？軽く地面に電気を流して磁力を生んだだけなんだけど」

エ：「それだけで、すでに熟練者の域に達してますよ……」

メ：「私たち…かなりすごい人と仲良くなつたね…」

ア：「…お前らも十分すごいと思うが…」

「…はあ…」

ア：「？」

と、まあこんな感じだ。

あのスミスって坊ちゃん、口の割に大したことなかったけどな。戦闘も召喚魔任せだし。

（注：アランが強すぎるだけで、スミスも学年上位の実力を持っています）

そっぴゃ、今日はたしかギルドでクエストを受けるとか言ってた日だな…。

ついに本格的な戦闘ができると思うとわくわくするな。

（『初日のドラゴンとの戦闘は……？』）

【聖グランベリア学園】

メ…「おはよう！」

エ：「おはよう。早いね」

メ：「だってクエスト受けれるもん！エリンだって楽しみでしょ？」

エ：「ええ。やっぱり自分の力を試してみたいですからね」

メ：「あれ？アランとケルトは？」

ア：「俺なら後ろ」

メ：「ひゃあ！び、びつくりさせないでよ！」

ア：「…勝手に驚かれても困る」

エ：「まあまあ…とりあえず、ケルトは遅刻だと思いますよ？」

ア：「遅刻か。…そういや、遅刻したらなんかあるのか？」

エ：「特には…まあケルトは常習犯なので色々先生の手伝いをさせられてますが」

メ：「あつ、先生着たみたいだね」

先生：「みんな席に着け！出席をとるぞ！……なんだ、またケルトはいないのか。しかたないや」

ガラガラッ

ケ：「セーフ！」

先生：「いや、余裕でアウトだ。懲りない奴め…。今期に入ってますで5回目だぞ？後で私についてこいよ」

ケ：「そ、そんな…」

ア：「まったく…自業自得だ…」

先生：「さて！今日は待ちに待ったクエストだ！まだ紙をもらっていないパーティーは今から私のところに貰いに来るように！」

エ：「私たちはいつもの4人でいいですよね？」

ア：「問題ないな」

メ：「うん！」

ケ：「紙はここにあるから名前書こうぜ」

ア：「あれ、いつの間に戻ってきたんだ？」

ケ：「細かいことは気にするなっ」

ア：「……」

エ：「と、とりあえず、あとはリーダーを誰にするかですね」

ア：「ケルトでよくないか？」

ケ：「いや、実力的にアランじゃないか？」

エ：「私もアラン君で良いと思います」

ア：「おい、ちょっと待つて「私も良いよ」……」

ケ：「さて、リーダーも決まったし、あとはチーム名だな？」

メ：「はいはい！国家騎士団の紅蓮騎士団みたいな名前で白銀の騎士団が良いと思います」

「「「……」」」

ア：「……他に案は？」

エ：「……他に案もないみたいですし、それにしますか」

ケ：「ま、まあ、悪くはないよな。じゃ、ギルドに行こうぜ！」

ア：「ないなら仕方ないよな。では先生、行ってきます！」

先生：「気をつけていけよ」

【ギルド 深海の城】

ア：「ギルドの名前が微妙……」

ケ：「？そうか？」

メ：「早く入ろうよ」

ア：「あ、ああ」

中に入ると既に学園の生徒がたくさんいた。

辺りを見回すとクエストを受けて行こうとする者、まだ悩んでいる者がテーブルに座って話し合っている等していた。

ア：「受付は…と。…ああ、あった。すみません。ギルド登録をしたいのですが。」

受付：「登録ですね。かしこまりました。まずは個人でしょうか？パーティでしょうか？」

ア：「パーティで」

受付：「かしこまりました。ではこちらの紙に、チーム名とメンバーの名前、年を記入してください」

ア：「あつ、紙があります。これでいいでしょうか？」

受付：「少々お待ちを…大丈夫ですね。では、今から個別にランク決めを行ってもらいます。ただいま呼びました、係の指示に従ってください」

案内：「では、こちらへどうぞ」

今アランたちは、係の指示に従い、受付の横にあった通路を奥に進んでいる。

ア：「ランク決めか…何をやるんだ？」

エ：「ギルドの上位者と戦うのだと思いますよ？」

ケ：「おおよその力を見るんだろうな」

ア：「なるほどな…これは魔法陣か？」

ケ：「これで試験会場に行くんだろうな」

メ：「じゃ、みんながんばろうね！」

「「「ああ！！（はい！！）」「「「

みんなで決意を確かめあうと、みんな魔法陣へと足を進めた。

ア：「次はやつと俺の番か……」

座って待つてる間に他のやつは終わっていった。

最後で俺だ。

俺はさっきの案内が言ってた扉を開く。

扉を開くと闘技場が現れた。

ギルドの物とあるだけあって、学校の闘技場とは比べ物にならないほど大きい。

戦士A：「これで最後か。最後はなんだか貧弱そうだな」

ア：「早く始めましょう」

戦士A：「そうだな。最初はそつちからでいいぞ」

ア：「後悔しないでくださいね。天より来たりし雷の神トールよ。乱雲生みだし、大地を砕き、我に仇なす者に神の裁きを！ライトニングボルテッカー！」

戦士A：「な！バカな、それ、ぎゃああああああああ……」

……

アランの雷に魔法障壁を出すのを遅れてしまった戦士Aは感電すると、そのまま地面とキスをしていた。

ア：「……なんだ、一撃かよ……つまんねえな」

案内：「……報告します。ランクB、ギリ〃ヨザダコが受験者に負けました。どういたしましょうか？……はい、わかりました」

ア：「なあ、試験はもう終わり？」

案内：「一応、試験は終わりです。ランクはとりあえず、暫定でBです」

ア：「とりあえずってどういう意味？」

案内：「現在、Bより上のランクの判定者が建物内に居ないため、後日改めて試験を受けていただきたいと思います。よろしいでしょうか？」

ア：「それしかないんだろ？なら従うしかないさ」

案内：「ありがとうございます。それでは、再び元の魔法陣に入
て受付へ戻ってください」

アランが受付へと戻ってくると、近くのテーブルに笑いながら話し
合う3人の姿を見つけた。

ア：「ただいま」

ケ：「おつ、お疲れ！どうだった？俺は結構苦戦したぜ」

ア：「俺はまあまあかな……」

エ：「ランクは聞かされてませんが……どれくらいなのでしょう？」

メ：「私負けちゃったからなあ……」

ケ：「そんなに落ち込むなって！あつちはかなりの戦闘を積んで
てるはずだからな。まだ俺たちじゃ簡単に勝てないさ」

ア：「……（一撃で倒したが）」

エ：「私は倒しましたよ？ギリギリでしたけど……」

ケ：「げ……マジかよ……ならエリンはBかな？」

ア：「ケルトはどこまでいったんだ？」

ケ：「ん……壁際に追い詰めて上級魔法を当てたまではよかったん
だけだよ……魔力不足でさ、最後は殴り合いになってギリギリ倒した
よ」

メ：「……私なんか軽くあしらわれちゃったよ……あんまり戦えな
かった……」

ア：「そりゃドンマイ……」

アナウンス：「ピーンポーン……。チーム、白銀の騎士団の皆さま、
ギルドカードができたので受付まで来てください」

ア：「呼ばれたな。受付に行くぞ」

受付：「白銀の騎士団の皆さまですな？ではこちらをどうぞ。失く

すと再登録となるので気を付けてください」

ア：「ありがとうございます。ついでにクエストの掲示板はどこにありますか？」

受付：「それでしたら、テーブルに1つ、小型の魔法掲示板が置いてあるので、そちらからご確認ください」

ア：「そうですか、ありがとうございます」

ケ：「Cか。まあまあだな。みんなは？」

エ：「私もCでした。メシアは？…メシア？」

メ：「…わ、私は……うう……」

ア：「…悪かったんだな？まあ、問題ないから教えてくれ…な？」

メ：「…D」

ケ：「…まあ、チームだから問題ないな。それに平均では断然良い方なんだから気にするなっ」

メ：「うう……そういえば、アランは？」

ア：「俺か？Bだ」

「「「！！！！」」」

エ：「すごいです…」

ケ：「まさか学生でBをとるとは…こりゃ、学生新聞に載るんじゃないかね？」

メ：「…素直に喜べない私が居る…うう……」

三者三様の答えだな。

性格がよく表れてやがる。

まあ、メシアは別だな。

ア：「そんなにスゴイのか？」

エ：「たしか、入ってたでBを取ったのは毎年1人いるかいなかったよな？」

ケ：「ああ。Bを取るやつは1年の頃から騒がれてるからな。大体把握できるんだけど……そうか、アランがBとは…」

メ：「いいなあ……」

ア：「というわけで、談話しても先に進めない。とりあえず、クエストを何にするかだが……意見は？」

メ：「自分の力量を上げるという意味も込めて討伐系にしない？」

ケ：「それだったら、この周辺で最近出やすいゴブリン辺りが最適か？」

エ：「ここには転移魔法陣があるので少し遠い場所でも大丈夫みたいですね」

ア：「最初だし、近場でいいだろ。慣れてきたら遠くでもいいし。じゃあ、腕試しを兼ねて周辺の魔物討伐でいいか？」

「……はい！」「……」

受付に言われたとおり、テーブルの上の掲示板を操作して……

……操作の仕方がわからん。

ア：「ケルト……やり方を教えてくれ」

ケ：「ん？簡単だよ。指で掲示板に触れていけばいいんだよ」

なるほど……よつと……おつ、これがクエスト掲示板だな。

ここら辺の魔物討伐は……お、これなんか良い感じだな。

みんなに確認しておくか。

ア：「これなんかどうだ？」

エ：「ゴブリン討伐ですか。数は……50体ですか。中々多いですね。」

ケ：「数が数だからDランクなのか。」

ア：「メシアは相手が悪かっただけで、ゴブリン相手ならしっかりと戦えるだろうし、魔法の練習にもなる。ちょうど良いと思うんだが……どうだ？」

メ：「私はいいよ。がんばってみんなに追いつくね！」

ケ：「俺もいいぜ」

エ：「私も」

ア：「じゃ、受けてくる…って受付の仕方も知らなかったんだ」

ケ：「クエストの右上に番号があるだろ？それを受付で言えばいいよ」

ア：「おっけ。言ってくる」

ア：「すみません。受付番号D-015をお願いします」

受付：「…了解しました。Dランク、ゴブリン討伐でよろしかったですか？」

ア：「はい」

受付：「かしこまりました。では、気をつけていつてきてください！」

【ラグナ周辺 ラグナ平原】

街を出て歩くこと5分。

急に視界が開けたと思いきや、目の前には大量のゴブリンが居た。

ア：「…目の前だな」

ケ：「備考に行けばすぐわかると書いてあったが…ほんとすぐだな」

エ：「さて、どう戦いますか？」

ア：「ん〜…各自、試してみたい魔法や動きがあれば言ってくれ。それを重視して考える」

メ：「私は剣の動きを確かめながらやりたいです。魔法は追いつけないので、まずは体術をがんばります！」

ケ：「俺は火の上級魔法と新しく試してみたい魔法がある」

ア：「エリンは？」

エ：「私は魔力運用の効率化をやりたいと思います」

ア：「…？どういう意味だ、それ」

エ：「あれ？アランさんは知らないんですか？」

ア：「…ど忘れだ。聞いてれば思い出すかもしれない」

エ：「そうですね。では、説明しますね。魔力運用の効率化とは…簡単に言えば、自らが魔法を使うとき、必要以上の魔力を使用しないですむようにするための訓練のことです。教える人や使う魔法によって変わりますが、基本的に魔法を何度も使って感覚を覚えるのが一般です」

ア：「なるほど」

ケ：「そういや、アランはこっちに来る前はどこにいたんだ？転入だから他の学園に1年は居たってわけだろ？」

ア：「…まあ…バロスニア学園に居た」

メ：「ええ〜！」

エ：「メシアうるさい…」

メ：「だってあそこの学園って無茶苦茶有名だよ！？有名人とかが多く出てる学園だし！」

ケ：「そりゃ、名家の出がたくさんいるからな。最初から土台が違う」

エ：「…ということはアランさんは名家の出…ですか？」

ア：「いや、違う。俺の両親は普通の一般人だよ」

メ：「じゃあ一般入試ですか！？やっぱり、スゴイです！」

ア：「そう…なのか？」

メ：「すごすぎますよ！帰ったら話を聞かせてください！」

ケ：「…今はそれどころじゃないだろ。」

エ：「その通りです。さっさと倒しましょう」

ア：「そうだな。じゃ、各自勝手に開始で」

【ケルト視点】

さて、俺の前には8体程のゴブリン。

アランは各自で開始って言ってたけど、俺は何から始めようかな…

…やっぱ、最初は新技で、他のやつを驚かせないと！

ケ：「さあいくぜ！大地を切り裂く雷神よ。天を穿つ水神^{ミスガミ}よ。天地を震わす2神の轟き、全てを消す我が刃となれ！天水地雷爆呑刃^{テンスイチライバクドンハ}！」

俺はそのまま、手を振り翳すと目の前を水と雷を混ぜたかまいたちがゴブリンの傍まで飛んでいく。

そのままゴブリンを切り裂くかと思いきや、ぶつかる直前、近くに居た6体を飲み込み消えていった。

かまいたちが通った後は電気の溜まった水が続いており、通るのが躊躇われるような状態になっている。

ケ：「敵を消すから血を浴びないですむけど、後が面倒だな……」

ア：「近寄れないな。1対1の時にやってくれ」

ケ：「ああ……」

気を取り直して、炎系の上級をやるか。

ケ：「地獄に住む悪魔の化身よ。業火に身を包み、竜の如く天を焦がし、燃ゆる息吹で敵を焼き尽くせ！ドラゴンヘルプレス……」

手を重ね合わせ、魔力を溜め、一気に敵へ放つと放射線状に黒い炎が広がり、残りの2体を津波の如く飲み込んでいった。

ケ：「こっちはなかなかだな。」

メ：「周りにも被害が出そうなんだけど……」

ア：「やっぱ1人の時に使ってくれ」

ケ：「うう…」

『結局弄られたケルトだった』

ケ：「ちよっ！待てよ、さk」

『ゴッドダークブレス！！』

ケ：「ぎゃあああああああああああ………」

『こうして哀れな子羊が夕飯へと成りました♪』

『他は割愛しm』

メ：「私たちも見せなさいよ！」

エ：「ほんとです…あの事をバラしてもいいのですか？」

『…あのこいつて？』

エ：「もちろん…ルh」

『わかりました！書きましょう！』

メ：「…何のこと？」

エ：「あなたは知らなくていいことですよ」

【エリン視点】

さて、あつちではケルトが中々危ない魔法を使ってますね。
あの範囲だと、私の獲物まで奪われそうですね…。

今回は数を撃ちたいので無詠唱がベストかな…？

エ：「氷撃槍覇！水天爛零龍！次元乱水牢！氷狼大寒波！」

次々に高位な魔法を連発し、周りを氷の世界にしていくエリン…。

まさに氷の女。

エ：「あなたも凍らしますよ？」

『やめてください…』

エ：「まったく…」

ア：「スゴイな。一面、氷の景色しかないな」

エ：「あ、見てたんですか？」

ア：「一部な。まあ、隣から寒気がすればすぐ見ちまうだろ」

エ：「あう…すみません」

ア：「いや、これがお前の戦い方なんだろう？なら仕方ないさ」

エ：「はい…がんばります」

ア：「あゝ…俺が偉そうな事言える立場じゃないよな。悪い」

エ：「いえ、尤もなので…ありがとうございます」

やつぱり…アランさんは…／／／／

【メシア視点】

みんな、どんどん敵を減らしてるなあ…。

特にアランさんなんか一瞬で数を減らしてるし…。

よし！私だって頑張るもん！

メ：「はあああああああ！」

大剣を振り回し、敵に叩きつける！

普通の剣みたいに切るのではなく、叩き潰すのが大剣の戦い方だ。

…そうやって、家では教わった。

もちろん、ただ振り回すだけでなく、近くににいる敵、遠くにいる敵

を見極めて順番に倒す。

こうすることで洞察眼が鍛わり、瞬時に物事を対処できるようにな

る…らしい。

私の父上の受け売り文句だ。

気がつけば、周りの敵は残ってなかった。

ア：「お疲れ」

メ：「お疲れ様です！」

ア：「見事に粉碎したな」

メ：「剣の修業ですから、焼けてたりしたら変でしょ？」

ア：「属性を剣に纏わせればならないこともないぞ？」

メ：「え？どうやるんですか？」

ア：「…あんまり他人に教えられる自信がないから、父親とかに聞いた方がいいよ」

メ：「…わかりました」
多分、父上の方が知ってると思うんだよね。
…確証はないけど。

【アラン視点】

それぞれが戦闘を始めたな。
…騒がしいと思ったら、ケルトが色々やってるな。
融合魔法に火の…あれは上級か？
…なんでギリギリだったんだろうな？
さて、エリンの方は……寒いな。
彼女を中心に氷の円ができてやがる…。
圧巻としかいいようがない。
最後にメシアは…最初に言ってた通り、剣の動きかな？
…おっと、俺もそろそろ動かないとな。
ア：「…雷瞬」
…ふう…何事も試してみるもんだな。
体を雷化させて、光速で動く…ぐつ。
…やっぱ、慣れないとキツイもんだな。
あまりの速さに体がついてきてねえ…。
慣れるまで長い時間の使用は不可能だな。

ア：「よし！そろそろ終わった、帰るぞ」
エ：「中々有意義な時間でしたね」
ケ：「そうだな。たまにはストレスを発散しないと！」
メ：「あんたにストレスなんかあるの？」
ケ：「当たり前だ！」
ア：「はあ…おい、いい加減にして帰るぞ」
エ：「…ふふっ」

【ギルド 深海の城】

ア：「ただいま戻りました」
受付：「おつかれさまです。こちらが褒賞となります」

ア：「はいよ」
テ：「ブルには、今回の褒賞…銀貨4枚があった。
ケ：「まさかDランクを受けるとは思ってたから、良い収入
だよな」

エ：「まあ、今は買う物ありませんが…」
ア：「とりあえず、学園に報告しに行かないか？」
エ：「そうですね。では、行きましょう！」

【聖グランベリア学園】

ア：「ただいま戻りました」

先生：「おお、お帰り。さて、報告を聞こうかな？」

ア：「はい。Dランクを無事成功させてきました」

先生：「…え？Dランク…と、言ったかい？」

ア：「はい。そう言いました」

先生：「…ギルドランクはどうだったかい？」

ケ：「俺とエリンがCで、メシアがDでアランがBだよ」

先生：「な…アラン君！本当かい！？」

ア：「一応…」

先生：「素晴らしい！学生でBを取るなんて…無論、DやCが悪いわけではないことはわかつてはいるんだが…Bか…」

メ：「先生！早く帰らしてくださいよ！」

先生：「ああ、そうだったね。今日はもう終わりでいいよ。アラン君は明日以降、学園新聞に載せる為のゴタゴタがあるかもしれないから心構えだけでもしておいてね」

ア：「…はあ、わかりました…」

【寮】

メ：「やっぱり、先生驚いてたね」

ケ：「でも負けるってのはやっぱり悔しいな」

ア：「早く抜いてくれ」

ケ：「無茶言っくなよ…」

エ：「ふふっ。でも、まだまだこれからですからね。気を引き締め
ていかないと！」

「「「ああ！（はい！）」」」

ア：「じゃ、今日はこれぐらいにして明日に備えるか」

メ：「また明日ね」

ケ：「明日もギルドでクエストな！」

エ：「1週間はクエスト漬けですね」

ア：「ああ。じゃ、お休み！」

こうして初めてのクエストは終わった。

俺は久しぶりにリュック（神に貰った）の中身を漁った。

…そういえば、肉を大量に狩ったからな…。

肉を冷蔵庫にしまうと、さらにリュックを漁ろうとしたが、ほとんどが肉のため、あったのは石だけだった。

ア：「そういえば、この石ってなんか特別な力があるのかな？ 珍しかったから拾ってきたけど…」

…この石の凄さを知るのは、また数日後の話である…。

第六話 バトルバトルバトル！（後書き）

長い…

感想、誤字脱字がありましたらよろしくお願いします！

番外編 魔法呪文集1＋色々なあれこれ（前書き）

予想通り更新が遅くなりました…

次の話も書き始めてますが納得できるできになるにはまだまだ程遠
そうです

番外編 魔法呪文集1＋色々なあれこれ

【火】

- ・「燃えろ、炎撃」(低級)：炎の塊を飛ばす
- ・「燃え立て、火柱」(低級)：火の柱を指定した場所に立てる
- ・「護れ、炎陣壁」(低級)：使用者の周りに火でできた壁を作り出す

・「我が身に抱くは怒りの力。紅蓮の鎧」(低級)：使用者の体に炎でできた鎧をまとう

・「地獄に住む悪魔の化身よ。業火に身を包み、竜の如く天を焦がし、燃ゆる息吹で敵を焼き尽くせ。ドラゴンヘルプレス」(上級)：放射線状に黒い業火が津波のように広がる

【水】

- ・「凍れ、氷撃」(低級)：氷の塊を飛ばす
- ・「満ち立て、水柱」(低級)：水の柱を指定した場所に立てる
- ・「凍り立て、氷柱」(低級)：氷の柱を指定した場所に立てる
- ・「護れ、水陣壁」(低級)：使用者の周りに水でできた壁を作り出す

・「水よ。大地を満たし、我を包め。水流蒼壁」(中級)：「水陣壁」の上位版で、より強く、持続時間も長くなっている

・「撃ち抜け、氷撃槍」(低級)：氷の槍を飛ばす

・「水の精霊よ、我誓う。其の力、大切のものを守るために。永久氷壁」(上級)：使用者の周りに解けることのない氷の壁を作り出す

・「水の精霊よ、彼の者を切り刻め。氷刃」(低級)：氷の刃を飛ばす

・「放て、水の矢」(低級)：水の矢を放つ

・「海の魔精リヴァイアサンよ。怒りとともに猛狂い、水面に煌めく津波となれ。激流大津波」(中級)：伝説の海の魔精リヴァイア

サンの起こした津波を再現

- ・「無限に並びし氷天の槍よ、眼前に見える彼の者を貫け、氷撃槍覇」(中級)：「氷撃槍」の上位版で、一度に放てる数が増えている
- ・「天に浮かびし水たちよ、天を司りし龍となりて、敵を滅せよ。
スライテンランレイリユウ水天爛零龍」(上級)：上空に乱雲を起こし、雨を降らし、それを結合して氷の龍を生みだす。龍のランクは氷の上位の零
- ・「水よ。敵を閉じ込めるは水の塊。しかし、これ何人を跳ね返す堅守な護りなり。
ジゲンランスイロウ次元乱水牢」(上級)：対象を覆うように水の牢を作り出し、内部で異次元空間を作り敵を葬り去る
- ・「大地を埋め尽くす氷原の狼よ。凍える寒さとなり、我に仇なす者を閉じ込めよ。
ヒョウロウタイカンバ氷狼大寒波」(上級)：氷の狼を作り出し、周囲に向けて放つ。あまりの寒さに周囲の気温は急激に下がり、触れずとも凍りついてしまう

【木】

- ・「刺され、木弾」(低級)：木の塊を飛ばす
- ・「育ち立て、木柱」(低級)：木の柱を指定した場所に立てる
- ・「奮えたて大地よ、神秘の森よ。我を守護せよ、森の守護者」(中級)：使用者の前に木で作られた騎士を生みだす。形や強度は使用した魔力の量や使用者の適性に委ねられる
- ・「母なる大地よ。大いなる力と化して敵を沈めよ。アースクエイク」(中級)：指定した場所に局地的な地震を起こし、敵を地中に沈める

【雷】

- ・「轟け、雷撃」(低級)：雷の塊を飛ばす
- ・「落ち立て、雷柱」(低級)：雷の柱を指定した場所に立てる
- ・「天より来たりし雷の神ツールよ。乱雲生みだし、大地を砕き、我に仇なす者に神の裁きを。ライトニングボルテッカー」(上級)：指定した場所に無数の雷を落とし、傍から見ると神々しい景色となる

る。別名「雷神のハンマー」

・「雷瞬」(アランオリジナル魔法) : 体を雷の速さで動かす魔法。空気中の分子と体に纏った電子の反発を利用するため、使用者は光り輝いて見える。アラン曰く「雷化」とも言う

【土】

・「穿て、地撃」(低級) : 土の塊を飛ばす
・「穿ち立て、土柱」(低級) : 土の柱を指定した場所に立てる
・「砕け、砂弾」(低級) : 砂の塊を飛ばす
・「砂連弾」(アランオリジナル魔法) : 砂の塊を無数に飛ばす。
本来、砂弾と同じだが、砂弾1つと同じ魔力で無数に撃てる地味な効力を持つ

【闇】

・「喰らえ、闇撃」(低級) : 闇の塊を飛ばす。当たった場所の感覚を一時的に失くす効果もある
・「刈り立て、闇柱」(低級) : 闇の柱を指定した場所に立てる
・「沈め、黒弾」(低級) : 黒の塊を飛ばす。魔法に当たった場合のみ、その魔法を無効化できる

【光】

・「輝け、光撃」(低級) : 光の塊を飛ばす。
・「煌き立て、光柱」(低級) : 光の柱を指定した場所に立てる
・「光れ、ライトボール」(低級) : 使用者の掌に光り輝く球を出す。辺りを照らすことが主な目的となる

基本属性以外

【風】(秘伝属性: 血筋のみが使える属性。アランはチート)

・「風の精霊よ、彼の者を切り刻め。風の刃」(中級) : 風に魔力

を込めて飛ばす。性質上、魔法・物質を簡単に切ることができる

- ・「風の精霊よ、何人たりとも防げぬ風の刃で全てを断ち切れ。断人風凱」（中級）：風の刃の上位版。しかし、風の刃より1つ1つが小さいため、かわすのが困難

【融合魔法】

- ・「風よ、雷よ。冷たき息吹に身を任せ、鋭き雷の矛となり、汝、嵐の如く舞い誇り、風の盾となり我が身を護れ。ランブライムフラッシュ嵐舞雷矛風盾」（中級）：風と雷の融合。使用者の周りに嵐を生み、その風による防御と嵐に含まれる無数の矛の形をした雷で攻撃する攻防一体の魔法
- ・「大地を切り裂く雷神よ。天を穿つ水神よ。ミズガミ天地を震わす2神の轟き、全てを消す我が刃となれ。テンスイチャライバクドンハ天水地雷爆吞刃」（中級）：雷と水の融合。手を水と雷を混ぜた魔力で覆い、振り抜くことでこれを飛ばす。飛ばした後は電気分解により、触れた対象を飲み込むように消す

【召喚魔法】

- ・「我と契約し者よ。契約に従いその姿を現せ」：目の前に使用者が契約している召喚魔を呼び出す。複数いる場合は使用者が意識内で選ぶ。一般的な召喚魔の召喚方法で学生が習う召喚魔法はこれが唯一

ア：「……というわけで急に呼び出されたわけだが……」

『まだ大まかにしか魔法の事知らないだろ？』

ア：「そうだな」

『ということで、今回、いつものメンバーでフリートークをしてもらう。お題は「魔法に関して」』

ア：「…俺、話に入れなくなっけ？」

『トーク終了後に他のやつ記憶を消すから遠慮しないで聞いて良
いぞ。もしくは自分でお題を出して答えてもらえ』

ア：「なるほど…」

メ：「で、魔法についてだっけ？」

ア：「ああ」

ケ：「習わなかったのか？」

ア：「漠然としてしか知らない」

エ：「では、私が説明しますね。まず始めに、魔法とは大まかに神
秘的現象を起こす物としてしかわかっていません」

ア：「なんか微妙だな」

ケ：「調べようにも文献もないし、それに関する物がないからな。
感覚で覚えるしかないんだろ」

メ：「理解しようにも、まだまだわかってないことが多いしね」

ア：「そうなのか？」

エ：「はい。基本属性はわかりますか？」

ア：「火水木雷土闇光無…だろ？」

エ：「最近では無も使える人が少ないため基本ではないという声も
ありますが…今の定義ではそうなります」

ケ：「で、ここからが本題。この基本属性以外にも属性はあるんだ」

メ：「例として、私が使う風は秘伝属性なんだよ？」

ア：「そうなのか？」

メ：「あれ？知らなかったの？…そういえば、この前の試合で風を使ってたけど、アランって血筋の人間だったの？」

ア：「知らんけど使えた」

「…」

エ：「と、とにかく、今のところメシアの風みたいな特殊な属性は、血によって遺伝されるという事がわかっており、それ以外で使うのは不可能だということがわかっています。つまりアランさんが使えたのは血筋の人間ということだと思います」

ケ：「他にも確認されてるの毒、神だけ」

ア：「毒と神？」

ケ：「毒属性については簡単だ。使用する物がほとんど毒の効力を持つている。つまり毒まみれだな。使用者に効力はないが他のやつには空気感染する可能性があるから侮れない」

メ：「逆に神属性はほとんどが謎のまま。昔の書物に神属性の事、例えば、どういう性質を持つかとか、どんな力を持っていたとかしか書かれていないの。近年では、使っている人を見たことないから実際はなかったんじゃないかって説もあるぐらいの。逆に王族だけの魔法とも言われてるし」

エ：「まあ、まだまだ見つかる可能性はありますし、融合魔法ももしかしたら新属性の魔法という可能性だってありますから」

ア：「難しいんだな」

ケ：「そういうこと！じゃ、話題を変えてプライベートタイム！

！」

「…へっ？」

ケ：「じゃ、俺から！エリンとメシアのス「死に晒せ！」ぶげらっ」

ア：「まったく…ろくな質問をしないな…じゃ、俺から…俺は休日の過ごし方を知りたいな。こっちに來てから何をすればわからないんだ」

エ：「私は家で母親の手伝いや本を読んでいますね」

メ：「私はお菓子を食べたり作ったりしてるかなあ？」

ケ：「俺は家の方針で戦ってばっかだな」

ア：「どういうことだ？」

ケ：「ああ、説明してなかったな。俺の家系は代々、有名な魔術師や戦士を世に送り出してるんだ。だから俺にも期待がかかってるわけさ」

ア：「へえ。エリンとメシアの家は？」

エ：「私の家は極、一般的な家庭ですよ。姉は魔法部の部長をしますけど」

ア：「魔法部？」

メ：「そういえばアランは知らなかったね。私たちの学園には部活動があつて、放課後に色々な活動してるんだよ」

ケ：「有名なのは、俺が所属してる闘技学の延長線上の魔闘部やエリン・メシアが所属してる自らの魔法技能の向上を目指す魔法部、新たな魔法を日々考えてる魔研部とかだな」

ア：「部活動…」

エ：「アランさんは所属しないのですか？」

ア：「んゝ強制じゃないなら入らないと思う」

メ：「えゝ！なんで？楽しいよ？」

ア：「…まあ、強制されることが嫌いなんだ」

エ：「人それぞれですからね。…で、休日の話に戻りますが、アランさんはどうお過ごしなのですか？」

ア：「寝てるな」

「…」

ア：「起きるとすでに夜中なんだ。だからまた布団にもぐる」

メ：「…今度から起こす？」

ア：「…自分で努力するよ」

ケ：「よし、次の質問！好きな人はいるのか！？メシアから！」

メ：「わ、私！？い、いないよ！次、エリン」

エ：「私ですか？まだいいですよ。次はアランさんで」

ア：「いない」
ケ：「俺もいないな」
「「「「「」」」」」」
ケ：「みんないないとかつまらないな」
ア：「無理に聞くものじゃないだろ」
メ：「ふっふっふ…」
エ：「メシア…危ないよ…」
ケ：「一体どうしたんだ？」
メ：「よくぞ聞いてくれました…ここにあるのは真実の目というもののすごいアイテムなのだー！」
ア：「…予想できるが、効果は？」
メ：「相手に聞いた言葉に対する本当の答えがわかるの」
「「「「「」」」」」」
メ：「では、まずはエリンから！」
エ：「え！？いや、そういうのは止めましょう！」
ケ：「（少し気になるかも）」
ア：「メシア…そういうのは自分からが定石だ」
メ：「へ？」
ア：「ということで取り上げ」
メ：「あ！見たいのに…」
エ：「ふう…危なかった…」
ケ：「何が危ないんだ？」
エ：「ふえ！な、なんでもありません！」
メ：「怪しいなあ…」
エ：「なんでもありませんったら！」
ケ：「お、スクープ！学園アイドルに淡い想い人か！？」
エ：「そ、そんなスクープとかじゃないですから！！」
ア：「へえ…エリンってアイドルなんだ…」
メ：「人気スゴイですよ？この前の親衛隊でわかんと思います」
ア：「…ああ…いたな、そんなのも」

エ：「で、では、次の質問を！持っている鬼神石の見せあいでもし
ませんか！？」

ケ：「（話をそらしたな）」

メ：「…鬼神石？…何だっけ？」

ア：「俺も知らないな。ケルト、説明」

ケ：「はいよ。鬼神石とは、遙か昔、神々が覇権を争っていた時代に敗北した神や鬼と呼ばれる存在が封印された石の事だ。ランクもあつて下鬼、中鬼、上鬼、最鬼、下神、中神、上神、最神があり、絶大な力を持つと言われてる魔神や鬼神、幻神と呼ばれる3大神石があるとされている」

ア・メ：「へえ」

エ：「私は水の下神です」

ケ：「俺は火の最鬼だ」

メ：「私は属性がわかんない中鬼…」

ア：「俺は持っていない」

エ：「持っていないのですか？」

ア：「そもそも鬼神石を見たことが無い」

ケ：「これだよ」

ア：「…1つ1つ形は変わるのか？」

エ：「加工されたな物じゃない限り自然な形ですね。加工された物は武器や服に取り付けやすいように個人のオーダーメイドになります。一番多いのは、球型ですね」

ア：「…やっぱ、記憶にないな」

メ：「…ということは、石の加護無しであんなに強い…？」

ケ：「あ…」

ア：「どんな加護かわからん」

エ：「石の属性やランクによってかわりますが、基本的に身体的能力の向上、魔法威力の向上が主です。石の属性は使う魔法と一致することですさらに威力が上がります。私なら水系を使えばかなり威力が上がります」

ケ：「俺のは魔法系は上がらないが、身体能力がかなり上がるんだ」
ア：「…クエストの時は使ってたのか？」

エ：「使うのではなく持つだけで効果がありますよ。私は意識して効果を使ってませんが」

ケ：「俺も効果は使ってない」

メ：「私もー」

ア：「…（なら俺と大差ないんじゃない？）そうか」

ケ：「それじゃ、次の…おっと、もうこんな時間か」

エ：「そろそろ帰りましょうか」

ア：「ああ、お疲れ〜」

メ：「じゃあね〜」

『というわけで、少しばかり追加的な説明をさせていただきました。今回の主催は私、アクアでした。なお、神様のアレは変な暴露はなかったため使用されてません（笑）そして、今からは彼らの日常生活をお届けしたいと思います。でわでわ〜』

『ある日の日常』

【ケルト視点】

今日は休日ということもあって、喫茶店にいる

ここは俺らが暇な時によくいる店で、今回はアランに教えるついでで立ち寄った

外見はいたって普通の外装

内も落ち着いた雰囲気でゆっくりとリラックスできるようになっている

まあ、俺らが座るのは外のテラスなんだけどな

コ。ダを連想してもらうとわかりやすいか？

ケ：「マスター！久しぶり！」

マスター：「みなさん、お久しぶりです。：おや、後ろの方は見かけない方ですね」

ケ：「今年から学園にな」

ア：「アランといえます。今後とも、よろしくお願いします」

マスター：「こちらこそよろしくお願いします。ではメニューをどうぞ。他の3人はいつものでいいかな？」

「「はい！」「」」

ア：「じゃあ俺は：ダージリンで」

マスター：「はい。かしこまりました。いつもの席でよろしかったですか？」

ケ：「ああ。頼んだ」

外に出ると決まった場所に行く

この喫茶店は通りの側にあり、横を見れば通行人の姿がよく見える

：まあ、逆に俺らの姿もよく見えるわけだ

俺らが好んでこの場所にするのに理由はない

ただ、太陽の日差しが気持ちいいからだ

ア：「ここの常連なのか？」

ケ：「ああ。ここは落ち着けるからな」

ア：「そのわりに外だな」

メ：「外の方が気持ちいいからね」

エ：「今日も暖かくてお茶を飲むのには最適ですね」

雑談をしながらいつもの定位置に座る

アランは初めてだからじつと見てるな

ア：「決まってるのか？」

メ：「ケルトが右隅で私がその隣。で、エリンがケルトの向かい側なんだよ」

ア：「なら、俺はエリンの横に座ればいいのか」

マスター：「お待たせしました」

ケ：「さすがマスター！いつも早いな！」

マスター：「今日は少し遅いですよ。では、ごゆっくり……」

「ねえねえ、あそこの4人組すごくない？」

「ほんとだ！美男美女がそろってるね！」

「誰が好み？」

「あの足組んでる黒髪の彼かなあ？」

「やっぱり！？かっこいいよねー！！」

…アランの事が…

たしかにアランは無茶苦茶かっこいい

今なんか、足を組んで片手に紅茶を飲める姿は絵になるぐらいだ
男の俺ですら認めれるんだから、女からすればそうだな

…女からすれば？

そっぴい、メシアやエリンはアランの事をどう思ってるんだろうな？

「彼、隣の子と付き合ってたりにしてるのかなあ？」

「違うなら狙っちゃう？」

「あははっ、狙いたいね！」

そんな言葉を聞いてると、エリンの顔がだんだん赤くなっていく

ア：「エリン？顔が赤いが大丈夫か？」

ちよっ、お前、その原因の張本人が何を聞いてるよ！！

エ：「え？あ、うん。大丈夫だよ……」

声が小さくなってるぞ

全然大丈夫に見えないな

メ：「かなり意識しちゃってるね（小声）」

ケ：「だな。その割にアランのやつはまったく動じてないな（小声）」

「

メ：「まさか、自分のことだと気付いてないとか？（小声）」

ケ：「いや、それはないだろ？（小声）」

メ：「それだと、確信犯だよ？（小声）」

ケ：「…確認してみるか（小声）」

メ：「ねえアラン？あんなに他の女の子から噂になってるけど、そういうのには慣れてるの？」

ア：「？何のことだ？」

ケ：「まさか、気づいてないのか？」

ア：「？」

ケ：「…お前、自分の顔、鏡で見たことあるか？」

ア：「いや、ないな」

ケ：「…どんな生活してたら自分の顔を見ないで生活できるんだよ」

ア：「家にいる時間が少なかったからな、仕方ないだろ。……まさか、さつきから聞こえてくる黒髪ってのは俺か？」

ケ：「他に誰が黒髪だよ」

ア：「（キョロキョロ）…周りにはいないな」

メ：「はい、鏡。これで自分の顔を確認したら？」

ア：「ああ。……これが俺か。そんなかつこいいとも思えんが……」

ケ：「よくそんなことが言えるな」

ア：「お前の方がかつこいいと思えるからな」

メ：「黒髪ってここじゃ珍しいからね。それが一際目立ってるのかも」

ア：「俺から見てお前はかつこいいしメシアやエリンはかわいいと思う。だが、俺自身はそこまでだと思うんだがな……」

ア：「俺から見てお前はかつこいいしメシアやエリンはかわいいと思う。だが、俺自身はそこまでだと思うんだがな……」

エ：「そんなことないと思うよ？だってアランさん……はう／／／／」
あらあら……エリンのやつ、完全にアランの虜だな
今まで見たことない表情だぞ、おい

メ：「恋してるね……いいなあ……」

ケ：「俺という存在がいること忘れてないか？」

メ：「あんたなんか幼馴染なだけじゃん／／／／」

ケ：「ひどいな！おい！」

ぎゃあぎゃあと騒ぐ俺たちだが、次のアランの言葉で固まる

ア：「お似合いだと思うがな……ズズッ」

……そんな紅茶を飲みながら言うなよ……

絵になりすぎて反論できないだろ！

メ：「お似合いに見えますか？」

おい！メシアも聞くなよ！……って、え？

ア：「ああ。互いに信頼関係が伺える。良きパートナーになれるだろう」

おいアラン！

自分の事はほつといて俺たちに構うとはいいい度胸だな！

そつちがその気ならこつちも言つてやる！

ケ：「そういうお前らだつて中々良い雰囲気じゃないか？」

エ：「えっ、えっ？そう見える？」

そつちが反応するか！

アランなんか目を閉じて紅茶を飲んでるし！

ア：「俺なんかがエリンと付き合ってるなんて恐れ多い……その言葉はエリンに失礼だろう」

O M A E !

確信犯か？確信犯なのか！？

メ：「アラン……隣を見て言つたほうが良いと思うよ？」

ふう、一瞬俺じゃなくなつたぜ

メシアはさすがの突っ込み……いや、珍しい突っ込みだな

ア：「隣？……エリン、大丈夫か？顔が真っ赤だが」

エ：「う、うん……大丈夫だよ……ボンツ！」
頭がショートしたよ……

こんなエリン見たことないが、ほんと冷静だよなお前は！

ア：「ほんとに大丈夫か？なんなら俺の肩にもたれかかるといい」
地雷踏んじやったー！！！！

お前、華麗に言っちゃうなあ、おい！

メ：「……春だねえ……」

ケ：「お前、まだそんなセリフを言う年じゃないだろ」

メ：「はあ……あのやりとりを見てるとそう言いたくなるわよ」

ケ：「まあ、たしかに」

今はエリンがアランの腕にくっついてるな

……いつの間に！？

ア：「どうしたケルト。顔がひどいことになってるぞ。それじゃ、せつかくの顔が台無しだ」

O M A E G A I U N A

はあはあ……性格が壊れるよ……ほんと

メ：「まあ、エリンは幸せそうだからいいよね……」

ほんとだ……目がトロンとしてるよ

……まあ任せるか

ケ：「じゃ、そろそろ帰るか」

メ：「そうだね」

ア：「ああ。エリン、行くぞ」

エ：「あ、うん」

ケ：「じゃ、マスターごちそうさま！」

マスター：「はいよ。また来いよ」

今、俺たちは商店街を歩いてる

後ろにはアランとエリンがいるが……

メ：「なんか……エリンが壊れた感が否めないよね……」

後ろを見るとクールに歩くアランの横にアランの腕に自分の腕をからませている幸せそうなエリン……

今日1日でエリンの知られざる姿をたくさん見た気が……

メ：「じゃ、あの2人はほつといて、私たちも楽しみましょ」

そついうと、メシアは俺の腕に抱きついてくる

ケ：「ちよつ、おい！」

メ：「嬉しいくせに」

ケ：「うっ」

ア：「ふう……やっぱ、お似合いだな……」

エ：「そうだね……ねえ？今日、私の家に来ない？」

ア：「構わないが……大丈夫か？」

エ：「うん。大丈夫だよ。お母さんに紹介するだけだから」

ア：「そうか。ならあいつらに一言言って行くか」

後ろからアランの呼ぶ声がする

ケ：「どうした？」

ア：「ああ、ここらで別行動にしないかと思って」

メ：「どこ行くの？」

エ：「私の家だよ」

ケ・メ：「「！?!?!」」

ま、まさか……エリンがここまで行動に移すのが早いとは……

メ：「そつか。エリン、頑張ってね」

エ：「うん」

ケ：「アラン、エリンを泣かすなよ？」

ア：「？あ、ああ」

あいつ、わかってるのか？

メ：「不安だね」

ケ：「ああ」

こうして、アランにくつつくエリンの姿を見ながら別れたのさ
この後？

さあ？

アランかエリンにでも聞いてくれ
俺とメシアはぶらぶらと商店街を2人で歩いただけだからな

番外編 魔法呪文集1＋色々なあれこれ（後書き）

『と、いうわけで彼らの休日を書いてみたわけですが、いかがだったでしょうか？』

『自分的にはエリンが壊れたな…と（苦笑）元々、ケルメシとアラエリの予定でどっかで話を書くつもりではあったので好都合ではあったのですが』

『さて、アランの冷静さ（鈍感さ？）には書いてて苦笑いしかありません（笑）』

『まあ、最後には結ばれるハッピーエンドであればいいな、と思っています』

『あつ、もちろんケルメシも忘れないように書きますよ』

『でわでわ次の話でお会いしましょう』

『もしかしたら登場キャラに自分を適度に出すかも（笑）』

最後にいつもの如く、感想、誤字脱字がありましたらよろしく願います！

第七話 噂と契約（前書き）

来週から試験なので更新が遅れそうです
そして、書いてて思いましたがかなりggggな気が……

第七話 噂と契約

【????side】

最近、彼と話してないな…

あ、読者の皆さま、お久しぶりです、神様の「ネリア」です

…あれ？

反応が薄い…

…もしかして名前出してなかったですか？

…（過去読み中）…

なんとこの事実！

ちよつと出てきなさいさk『なんだよ』早速、私に被せるとはいい度胸ですね？

『で、何か用？俺、忙しいんだが』

いつも寝てる癖に何を言って『写真』出てきてくださってありがとうございます！
うございます！

『で、名前を出してない件だっけ？』

そうなのです

なぜこんなにかわいいヒロインの名前を出さないですか？

『そもそもヒロインじゃないし』

……………マジですか？

『本気と書いてマジ』

うう……………

『で、用はそれだけか?』

今からでもいいからヒロインにできない?

『彼には予定で3人のヒロインがいるからもうこれ以上は面倒』
ひどっ!

『動画』

こんな末の者まで配役を考えていただきありがとうございます! う
う……もう消してよ……

『たまに見るから無理だ』

見ないで!

『いや…ねえ? 神様ともあろうものが…あんな事をしてるから…』
うう……

『まあ、ヒロインはあきらめて、彼に力やら知識やらを上げてくれ』
わかりました……

『たまには俺がしゃべりに来るから…まっ、楽しみに待つてな』
はいはい

『じゃ、シーユアゲイン』

…はあ…アルスはいつもいないし…オーディン様は宮殿だし…はあ
…恋したいなあ…

『夕日が照らす窓の側でちよっぴり寂しげなネリアだった…』

【聖グランベリア学園】

今日も空は青く澄み渡っている

先週は初めてのギルドということで丸々1週間をクエスト週間に
した学校側の意向で毎日、討伐やら雑用やらをやり続けたんだ

ま、月に1回クエストデーとかいうやつがあって、その日は学園全

体がギルドでクエストを受けなければならないらしい

そもそもクエストの結果が成績に反映されるらしいしな

そっぴゃ、ゴブリン討伐の後で聞いたんだが、普通の学生はDラン
クを1週間かけて成功させるらしいんだ

改めて3人の凄さを知ったよ（アランはさらに異常）

で、クエスト週間も昨日で終わり、今日からまた授業が始まる

この1週間は遅めに起きてたから少し寝ぼけながらの朝食だったが、
問題もなく今は教室に向かっている

ア：「おはよう」

「おはよう！アラン君！」

「おっす、アラン」

「久しぶり」

「クエストどうだったよ？」

「今日も凛々しいですわね、アラン様。ハアハア」

…最後のやつ、ちょっと待て。

どこに興奮する要素があった！

ケ：「おはよう。今日も人気者だね」

ア：「なんで俺みたいなのやつが人気なのかわからんがな」

ケ：「だからこの前言っただろ？」

ア：「顔がどうたら話か？外見だけで人を判断するのは悪い考え
だな」

ケ：「まあそう言っただけでやるなって。多分、お前のファンだろうし」

ア：「いらん」

そう

ケルトから聞いたのだが、俺のファンクラブもあるらしい

「も」というのは、ケルトやメシア、エリンのファンクラブもある
からなのだが

他の3人は容姿端麗、成績優秀（メシアは別だが）、さらに性格抜
群という超人だからわかるが、俺みたいな普通の人間のどこに惚れ
るのだろうか？

ア：『アランは鈍感だからな。どう考えても、お前も容姿端麗、成績優秀、性格抜群だぞ?』

ア：「いや、違うと思うんだがな」

ケ：「顔は上の上。成績は学年トップ。性格もクールで落ち着いてるの三拍子そろってるから、まちがいなくお前が一番人気だと思うぞ?」

違うと思うんだけどなあ……

あ、途中から加わったのはアクア・イスタロス。

いつも笑顔が爽やかな長身だ

成績は普通より上らしい

ア：『そんな笑顔でもないよ?』

ア：「な、こ、心を読むなよ」

ア：『仕様だ。あきらめてくれ』

仕様か

なら仕方ないな

ア：「そーいや、エリンとメシアは?」

ケ：「メシアは……寝てるんじゃないか?」

ア：『エリンは朝、委員会の仕事をやってたのを見たよ』

委員会か

忙しそうだな

ケ：「そーいや聞いたか?あの噂」

ア：『噂ね……いくつかあるけど?』

ア：「……噂って何のだ?」

ケ：「1つは学園頂上決定戦の件。もう1つは政府からの重大発表」

ア：『決定戦の方は去年もあったからね。そろそろだと思ったよ』

ア：「学園頂上決定戦?文字から考えればそれしか考えれないが、一応聞いておこう。……なんだそれ?」

ケ：「名前の通り、学園で優れた人物を決める大会だ。上位者には色々な特典があるんだぜ」

ア：『具体的には鬼神石を贈与されたり、強力な武具を作れたりし

ますよ。そして、望めば軍の見学も行えるそうです」

ア：「へえ。中々だな。というか、鬼神石って何個も持てるのか？」

ケ：「ああ。効果が上乘せされたり、弱さを補えたりする。まあ、複数持つてるやつなんてそうそういないし、自分の苦手な属性の鬼神石は持つと反発するから大抵は対極の属性が同じ属性の物しか持たないな」

ア：「対極の属性？」

ア：『前に属性の優劣は聞いたと思うけど、優劣のほかにも属性同士の相性があるんだ。図で表すところなるよ』

そういうとアクアは手元にあったペンで空中に筆先を走らせていく大まかに出来上がった図を見ると矢印が色々な方向に向いているのがわかる

ア：『例えば火。火は図で見ると水に弱く、土に強いことが分かる。でも、それだけじゃなくて他の木と雷には相互関係にあるんだ』

ア：「相互関係？」

ケ：「融合魔法と同じ原理だよ。優劣の関係にある属性同士で融合させると威力は落ちるけど、相互関係にある属性で組むと威力や効果が大きく変わるのさ」

ア：『火と木ならわかりやすいよね。木に火を纏わせて使うことで物理的な威力を強めるのに加え、優劣にある水の魔法を木で防ぐこともできるんだ』

ア：「そうか。じゃあ、闇とか光とかは？」

ア：『その2つには相互関係はないよ。利点としては他の5属性の全てと相性良く使うことができて、反対に、決め手となるずば抜けた威力は出にくいんだ。もちろん、上級とかになれば話は別だろうけど』

ア：「なるほどな。よくわかる説明をありがとな。じゃあ次の重大は「おはよう！！」ああ、おはよう」

勢いよく扉を開けて飛び込んだのは迷うことなきメシアである朝から元気だな

メ：「ふう〜：遅刻するかと思った」

ア：『まだ10分はありますけどね』

ケ：「お前は寝すぎなんだよ」

メ：「えへへ〜：」

ケ：「笑うな」

ア：「：とりあえず、重大発ぴ「みんな席に着け！」……」

ケ：「アランドンマイ」

ア：『タイミングが悪かったですね』

先生：「ちよつと早いがHRを始めるぞ！まず去年もやった学園頂上決定戦についてだ！例年通り、来週の火の日から行う！ルールも例年通り、武器、魔法、召喚魔等、全てだ！相手を殺しさえしなければ大丈夫だ！今年も色々な特典があるから頑張れよ！」

「「「「うおおおおおおお！！！！」」」」

「今年こそ俺の天下だ！」

「ふつ、冗談は寝て言え。我の天下だ！」

いや、寝言は寝て言えじゃないのか？

そこの貴族みたいなやつAよ

先生：「次に政府からの重大な発表だ！最近、召喚魔の中に新たな種族が見つかったそうだ！まだ確認はされていないが、遺跡からの調査で実力者が特殊な召喚の儀を行えば神と呼ばれる種族と契約できるらしい！まだ君たちでは無理だと思いが将来を楽しみにするんだ！じゃ、これでHRを終わる！」

ワイワイ、ガヤガヤ

ア：「神…か（まさかあいつが召喚されるんじゃないだろうな？）」

ケ：「特殊な召喚の儀って言ってたし、学生である俺らが姿を見るのはまだないだろうな」

メ：「でも、見てみたいなあ〜：」

エ：「そうですね」

ア：『おや、エリン、おはよう。委員会ご苦労様です』

エ：「おはようございます。大変でした」

ア：「仕事って何やってるんだ？」

エ：「私は生徒会に入っているので今度の決定戦の進行や予算、他には多々ある書類の整理とかです」

メ：「大変だよね。私には無理だよ」

ケ：「大丈夫だ。絶対任せられないから」

エ：「責任が問われますからね」

メ：「そこまで言わなくても…」

ア：「まあ、メシアについてはそれぐらいにして授業に行こう。今日は何かやるって聞いたけど？」

ア：『今日は特別授業で召喚についてやるみたいだね』

エ：「場所は南にある召喚専用の施設ですね」

ケ：「召喚ってことはついに俺たちにも自分の召喚魔が持てるんだな」

メ：「これでスミスに大きな顔をさせなくてすむね！」

ア：「してたのか？」

ア：『君の前ではしてないよ。模擬で簡単に負けたからね』

ケ：「早く行こうぜ！結構遠いからよ！」

エ：「1階の転移室から行けます。転移を使わないと10分かかりますからね」

ア：「じゃあ、さっさと行くな」

【第2召喚施設】

転移先の教室を出てすぐのところに目的の場所があった

最初の感想は「広い」の一言に尽きる

工：「最大で50人が同時に召喚することができます。召喚の際、色々な危険が伴い、魔法陣の書き込み時のスペルミスもありますが、一番危険とされるのは召喚魔との対話です」

ア：「対話？」

メ：「何それ？」

工：「その辺の話は先生がしてもらえと思うので聞いていけば大丈夫だと思います」

先生：「エリンその通りだ。召喚の儀はやり方自体は簡単だ。床に魔法陣を書き、魔法陣に魔力を注ぎ、召喚のための詠唱を詠めばいい。だが、その間に色々危険が伴うのも事実だ。」

床に書いて、魔力を入れて、詠唱を詠むと…結構簡単なんだな

先生：「まずは魔法陣を書くときの危険。魔法陣の内軸と外周に古代ガリア文字で言葉を書くが、その言葉には精霊界から召喚された対象が魔法陣の外へ出ないようにして召喚者の安全を考慮した物だ。従って、1文字でも書き間違えると対象が外に出て逃げる時もある。召喚者を襲うこともある。だから書くときは複数人で確認しながら書くように。」

「大体何人ぐらいでやればいいですか？」

先生：「そうだな…5〜6人いれば3、4分で済むだろう。では次に対話の危険だ。召喚の際に召喚者は魔法陣の内側で対象と契約についての会話をするが、万が一契約に失敗した場合、素直に戻る物であればいいが、大抵、自由を得ようと召喚者を殺そうとする。だから対話の際は十分気をつけて、言葉を選んで行うといい」

「…あ、あの…もし失敗したらどうすれば…？」

先生：「そのときは、すぐに防御壁をつくって、外にいるやつが私か他の先生に助けを求めろ。強制的にだが、精霊界に戻すしか方法はない。他にも力で対象を屈服させれば契約することもできるが、君たち学生では危険なので力試しを申し込まれても断るようになること！いいね？」

「はい！」

先生：「では、各自5〜6人で固まって交代で契約を始めろ！まだ何回かは日数を取ってあるから無理して今日中に契約しようとしてもいいからな！」

「契約する数は自由なんですか？」

先生：「魔力が持つのであればいいが、私たちでも召喚するのにかなりの魔力を消費することになる。さらに、戦闘などで召喚魔を呼ぶと断続的に魔力を与え続けなければならないから、基本は1人1体までがベストだろう」

「わかりました！」

先生：「まあ、エリンやケルト辺りは複数体契約できるかもしれない。色々なやつと契約したいならしてみるといいかもしれん」

エ・ケ：「はい！」

【??? side】

今日は召喚魔を呼ぶ授業

俺には既にいるが、召喚魔は多いに越したことはない

俺ほどの力と才能がある人間を精霊共も見過ごす者はいないだろうだが今回の目的は召喚魔を呼ぶことじゃない

この前、大勢の前でこの俺に恥をかかせたアランとかいう庶民にちよつとした悪戯をしてやろう

すぐに謝れば心の広い俺は許してやったが、もう遅い！

まあ、やつの魔法陣のスペルを細工して守護のスペルを消してやれ

ばやつは慄き、すぐさま俺に泣きつくだろう
そうすれば、俺の思いのままだ
華麗にやつが召喚した物を倒し、やつを豚の世話係にして俺の復讐
は幕を閉じる……
くくくつ…想像しただけで俺の天才さがよくわかる！
さて、手下に指示をするとするか
待っているよ、アラン！

ア：「と、いうわけでいつものメンバーが集まったわけだが…誰か
らやる？」
メ：「はい！！私から行きたい！」
エ：「いいですよ」
ケ：「ああ、構わない」
ア：『大丈夫です』
メ：「じゃ、書くから、確認よろしくね」

ケ：「メシア。ここ違うぞ」
メ：「あ、ほんとだ！」
エ：「ここも違うよ」
メ：「うっ」
ア：「……」
メ：「わかったからそんな目で見ないで〜！」

結果…間違いが20個近く見つかった
メシアはちゃんと話を聞いてたのだろうか？

ケ：「頼むから死ぬなよ」

メ：「う…うん」

不安だ

エ：「しかし、私たちにできるのもここまでなので、あとはメシアが頑張らないと！」

メ：「そうだよ…がんばるよ！」

そういうと、メシアは魔法陣の中に入った

ア：「そういえば、呼ばれる対象ってどういう風に決まるんだ？」

ア：『流し込んだ魔力の質から相手が決めるんだよ。基本的に自分と同じ属性の生き物が呼ばれるけど、その生き物にもランクがあって、大体自分に合った生き物が召喚されるんだ』

ア：「へえ」

エ：「そろそろ始まりますね」

目を魔法陣に戻すと、さつきより魔法陣が輝いているように見える中ではメシアが目を閉じて、集中した顔で詠唱を唱えている

刹那、魔法陣が眩しくなるぐらい輝き始める

ア：「な、眩しすぎる」

ケ：「そのためにこのサングラスがあるんだよ」

外にあつたサングラスはこれのためだったのか

すぐさま、サングラスをかけると、中の様子が少しだが見える

中央に人の形をした物が見える

？：「あなたが私を呼んだのですか？」

中央にいる物から凜とした声が聞こえる

メ：「はい」

？：「私の名はシルフ。風を司る者です。私と契約しますか？」

メ：「はい！では…我、メシア…デュラハは汝、シルフと契約することをここに誓う！」

メシアが契約の言葉を言いきると魔法陣がほのかに淡い色に包まれるシ：「これで契約は終了しました。必要な時はいつでも呼んでくださいね」

そう言い残すと、シルフは再び光に包まれて姿を消した
それと同時に魔法陣の文字も消えていった

メ：「ふう…終わった…」

エ：「お疲れ様。無事、契約できましたね」

メ：「はあはあ…うん！」

ケ：「メシアはやっぱり、木じゃなくて風だったな」

メ：「あんまり使わないけど血だからね」

さつきより息が上がってるように見える

先生が言った通り、かなり力を使うようだ

次はケルトの番だな

ケ：「さて、書くか。確認頼むな」

ケルトがほとんど魔法陣に書き込んでいく

…さつきと書き方が違うのは気のせいだろうか？

ア：「なあ？さつきと書き方が違うのは気のせいかな？」

エ：「気のせいじゃないですよ。契約の仕方を説明した時に精霊の属性も説明しましたよね？」

ア：「ああ。自分と同じ属性の精霊じゃないとだめなんだよね？」

エ：「だめではありませんが、それなりの実力がないと契約はおろか、命が危険に晒されます。なので、学生である私たちは自分と同じ属性の精霊との契約を推奨されます」

ア：「相互関係の属性も危ないのか？」

エ：「優劣の属性よりは幾分か大丈夫ですが、多少は危険ですね。

…では、話を戻します。相手の精霊は魔法陣に注がれた魔力で判断すると言われましたが、厳密に言えば魔力だけではありません。魔法陣に刻まれた古代ガリア文字も影響されます」

ア：「…つまり、古代ガリア文字は目印として、もしくは何らかの方法で文字に対応した属性の精霊を呼ぶのか？」

エ：「その通りです。古代ガリア文字には属性を表すとされる文字がいくつかあることがわかっており、基本属性のスペルは教本にも載ってます。他の秘伝系は口伝、もしくは書物等で伝わるみたい

ので確認はできません。メシアは口伝で教わったと聞いてます」

ア：「なるほど。……そういや、俺、文字知らないな。」

エ：「……そうなんですか？」

ア：「ああ。属性のとかは教本で見たけど、他の文字は知らん」

ア：『それは僕が教えますよ。やるときに手伝いますね』

ア：「頼んだ」

魔法陣について会話している間にケルトとアクアの契約も終わったらしい

ケルトはともかく、アクアも終わったのか

ア：「終わった割に疲れてないな」

ア：『そうでもないですよ？大分疲れてます』

涼しそうな顔のアクアと死にそうなケルトを見比べて、単に魔力の量の違いだと思い、そこまで話題にはしなかった

エ：「では、私も契約してきますね」

ア：「ちなみにどんなのと契約したんだ？」

ア：『僕は闇の精霊のオルゴです。ちなみにケルトは火の獣、グレアですよ』

ア：「精霊と獣とどう違うんだ？」

ア：『簡単に言えば、実体があるかないかぐらいですよ』

ア：「そんなものなのか」

ケ：「うう……死にそう……」

ア：「じゃあ寝とけよ」

ケ：「おう……」

ケルトが倒れる様子を見ながら魔法陣の方に目を戻す

丁度、エリンが召喚するみたいだ

また、魔法陣が輝く

今回はサングラスのおかげで最初から見る事ができた

？：「汝、我を呼びし者か？」

魔法陣の中から低く、それでいて威厳のある声が響く

エ：「はい」

？：「我が名は水の守護者、ランス。汝、我と誓うか？」

エ：「はい。我、エリン＝カーラーは汝、ランスと契約することをここに誓う！」

再び、魔法陣が光に包まれる

ラ：「ここに誓いは立てられた。私の力を欲す時は呼ぶといい」

再び、光に包まれると姿を消した

契約が終わると、エリンは少し疲れた顔を見せるが微笑みながら近くまで歩いてきた

ア：「お疲れ」

エ：「ありがとう。予想はしてましたが、中々疲れるものですね」

ア：「ゆつくり休んでろよ。文字はアクアに教えてもらおうし」

エ：「わかりました。少し椅子で休ませてもらいますね」

エリンが少しふらつきつつも椅子の方へ歩いて行った

ア：「ということ、よろしく」

ア：『ああ。最初にどの属性を呼ぶんだい？』

ア：「雷かな」

ア：『了解。まずは……』

アクアに言われるように少しずつだが書いていく

他のやつと比べれば時間もかかったし、文字の大きさも不揃いな物が多いが渾身の一作だ

ア：『あとは詠唱を詠むだけだ。頑張れよ』

アクアはそういうと、魔法陣の外へと動き、待機する心を落ち着かせ、いざ詠唱を詠む（フリを）すると

「うわあああ！」

誰かが後ろから俺に倒れてきた

前に倒れそうになるが体制を整えると後ろを振り返る

そこには10歳ぐらいの子供が居た

ア：「（なぜ子供が！？）」

驚いていると、その子供は慌ててどこかへ走り去ってしまった
ア：「まあいいか」

興味を失くしたアランは再び、詠唱に向けて心を落ち着かせる
まさか魔法陣のスペルを変えられていると思いもせずに……

【??? side】

「これで良かったの？」

「ああ、十分だ」

ガキ相手ならあいつも隙を見せると踏んだ俺はガキに命じて後ろからぶつからせ、その瞬間、他の手下に1文字書かせることに成功した
これでやつは慌てて俺に泣きつくだろう
はははっ！

俺の栄光が戻るのもあと少しだ！

詠唱を詠むこと数分

魔法陣が輝きだしたことが目を閉じていてもわかる

しかし、エリン達に比べ、光が強すぎではないだろうか？

疑問に思いつつも詠唱を詠み終える

だが――

ア：『いけない！アラン！すぐに魔法陣から逃げるんだ！！』

何事かと思い、声に反応するも時はすでに遅く、魔法陣は完成していた

ア：『あの子供が来た時だな……まさかスペルを変えるなんて……』
スペルを変えた？

何のことだろうと考えていると

「グルルルル……」

どこかで聞いたことのある声が耳に届く
ゆっくりと……嘘であると信じて前を見る

巨大な体、金色に輝く鱗、とげのついた長い尾……

「小僧！！お前が我を呼んだのか！？」

そこには金色のドラゴンがいた

「きゃあああああああ！！！！」

「うわああああ！助けてくれ！！！！」

「なんで！？なんで攻撃が！？」

外からは阿鼻叫喚が聞こえる

それもそのはず

俺が魔法陣で呼んだドラゴンが魔法陣の隙間を見つけ、こじ開け、
広げようと体をねじ込んでいるからだ

アクアがエリン達と連携して何とか出るのを防いでいるが、あれで
はいつまで持つかわからない

やはり、俺がなんとかしなければ……

【???side】

まさか、サンダードラゴンを呼ぶとは……

あいつぐらいの力なら余程の物は呼ばれまいと思っていた最中の出来事だった

ドラゴン種は俺の力をもつてしても倒すことは不可能だ

予定と違ったがあいつはここで自分の実力不足という結末で死んでもらうとして、俺は逃げるとしよう！

【ケルトside】

ア：「おい！そのトカゲ！」

おいおい！アランのやつ、何言ってるんだ！？

狂って自暴自棄になっちまったのかよ！？

ドラゴン：「小僧…このサンダードラゴンの長、ガイアスに向かって良い度胸だ！普段なら即刻食ってやるところだが、我は召喚された存在。よって我は契約に基づき、貴様に対して力試しを行う！」
ドラゴンの長だと！？

鱗の輝きからただのドラゴンじゃないとは思ってたが、とんでもない化け物じゃねえか！？

ドラゴン種の長といえば、一晩で国を壊滅させることができるという力を持つって言われるし、やばすぎるだろ！

それなのにアランはなんで逃げないんだ！？

そもそも力試しは危険すぎるから止めるって先生にも言われただろ！

ア：「力試しか……いいだろう！俺は逃げも隠れもしない！俺の力で必ずお前を屈服させてやる！」

なななな何をバカな発言を……！！！！

ドラゴンを倒すなんて軍の幹部クラスでもないんだぞ！？

というか、単体でドラゴンに挑むとか無理もいいところだろ！？

メ：「ドラゴン相手に力で挑むなんて無謀だよ！」

エ：「その通りです！私たち学生が敵う相手ではありません！」

メシアとエリンが悲鳴を上げている

だが、2人の言うことは最もだ

俺も諫める為に声を荒げようとする

ア：『みんな落ち着くんだ。……俺たちはドラゴンの攻撃が周りに被害を出さないようにすることだけで十分だ』

メ：「なんで！？アランが死んじゃうよ……！」

ア：『大丈夫。……彼は強いから』

何を根拠に発言してるよアクアよ

【アラン side】

確認すべきことはたくさんあるが、まずは目の前の敵より周りの状況所々、結界に穴が空いているように見える

それがスペルを少し消された代償だろう

そこまで広くないように見えるからドラゴンの……いや、ガイアスの攻撃はそれほど外には漏れないだろう

漏れたとしてもエリン達や先生がいるから生徒への被害はほぼ無いといってもいいだろう

そう考えているアランに対し、焦らされるのが嫌いなのか、ガイアスは口に魔力を溜める――

ケ：「やばい！ブレスが来るぞ！！」

ブレスってなんだ？――そう考えるアランに暇を与えずにガイアスのブレスが飛んでくる

単に魔力の塊かと思いきや、膨大な電気を纏った塊が津波のように襲いかかってくる

ア：「広いな……土陣壁」

外に溢れた攻撃はさておき、自分は防御を固める

優劣を考えればそこまで焦る必要もないが、相手はドラゴンの長

ガ：「甘いぞ小僧！我が力を侮るな！！」

土の壁に雷の塊が食い込む

そう、発散されるず、土の壁を破ろうとしているのだ

メ：「嘘！優劣で雷が土に勝つはずがないのに！」

エ：「いくら属性の相性が良くても、あのドラゴンの攻撃に込められた魔力の量が、アランさんの防御に込められた魔力を大きく上回っているので消えずにいるのです！さすがドラゴン……といったところですか」

ケ：「感心してる場合かよ！？アランを助けないと！」

ア：「じゃあケルト。君に問うけど、君はあの攻撃に耐えられるのかい？契約で魔力が大きく失われているのに？」

ケ：「くっ……だけど」

ア：「今の状態じゃ、俺らが助けに行つたところで足手まといだ。」

…大丈夫、彼は強いから」

アクアが真っ直ぐ…一切も疑わない眼差しでアランの動きを見続ける

そんな様子を見て、自分らも信じようと思うケルトたちである

そんな外の様子を知らないアランはどう決着をつけるか迷っていた
ア：「（チート的な能力を思う存分使ってもいいが……見られると後々面倒だし……仕方ない、神様いるかい？）」

ネ：「（呼ばれて登場ネリアだよ♪どうした？）」

ア：「（外と内の景色と音を遮る魔法はないの？）」

ネ：「（あるよ）」

ア：「（どうイメージすればいいか教えてくれ）」

ネ：「（いいけど条件がある！）」

ア：「（……デートとかはなしだぞ）」

ネ：「（なんでわかったよ！？）」

ア：「（バレバレだ。ほら、さつさと教えろ）」

ネ：「（むう…簡単に結界をイメージすれば？あとは色をつけて、壁を防音素材にすれば終わりじゃない？）」

ア：「（……ずいぶんと現実的だな。まあ、やってみる）」

知りたいことを知ったのでこちらから一方的に遮断する

ア：「（音と景色を遮断する……！）」

イメージがまとまり、魔力を集中して放出する

……どうやらうまくいって遮断することができたようだ

先ほどから聞こえた悲鳴などが聞こえなくなり、周囲にはお互いの息遣いだけが聞こえる……

ケ：「何なんだよ！この結界はよ……！」

先ほどからできた結界にイライラを募らせる

中の様子は見えなくなり、声も聞こえない

まさか中にいるアラン本人が作ったなんて露にも思わず、少しでも破れないかと魔法を仕掛けてはいるが、全くの効果なし

エ：「ここまで強固だと諦めがついてきますね……」
メ：「もうだめ……」

契約での魔力消耗がここにきて猛威を奮う

そんな中でずつと涼しい顔をしているアクアは

ア：『そろそろ決着かな……』

と、誰にも聞こえないぐらいの小さな声で中の様子を呟いていた

【ガイアス side】

私のプレスが遂にあの小僧の土壁を破壊する

破壊と同時に辺りに残った魔力の衝撃波が巻き起こる

さらに小僧がいた場所は煙が立ち込め視界は悪くなっていた

人間としてはよく持った方だが、所詮、人間は人間……

ふっ……我に勝とうなど夢のまた夢の話というわけ――

？……どうということだ？

あの小僧の魔力がまだ――

ア：「そろそろ……決着をつけようか？」

煙が晴れる……

そこにいたのは先ほどと変わらぬ姿勢の小僧……

ガ：「……小僧。……どうやって我がプレスを耐えた？貴様の土壁は砕

いたはず……」

ア：「もちろん魔力で防いだただけだ」

ガ：「魔力で防いだ……だと？」

バカな……

ドラゴン種のブレスを己の魔力で防ぐだと？

ありえない…

ありえない…！！

ガ：「小僧…いや、『そなた』…といった方が正しいか？」

ア：「？どういうことだ？」

ガ：「認めてやろう、そなたの実力を。しかし、我もまたドラゴン種の長…。ただ引くのは許されない。だからこそ最後は正々堂々、全力でそなたと力技だけで戦いたい…： よろしいか？」

ア：「俺が勝ったら俺と契約するんだよな？」

ふっ…最後の最後まで自らの姿勢を崩さない

我を長と知ってもなお我と対等に居続ける

久方ぶりだ！！

ガ：「勝ったら…： な？」

2人を取り巻く魔力が濃くなる

息をするのが苦しいぐらいにだ

しかし、下を向かない、いや向けない

ここまでワクワクする力と力のぶつけ合いをできるのだから…：

…先ほどまでアランを困っていた土壁が何かの拍子に崩れ落ちる

ガラッ

「『ダークキューデラーマ！！』（ドラゴンフォース！！）」

2人の周りに集まっていた魔力が一瞬にして輝きながら魔法となつて激突した…：

【エリン side】

謎の結界が作られてからもうすぐ10分になる

相変わらず中の様子は見えない

変わったといえは中から飛んできた攻撃が止んだことぐらい

アランさん大丈夫かな……

私の側には疲れてぐったり倒れてるメシアとケルト、それに涼しい顔をしてるアクアさん

さつきからアクアさんは大丈夫って言ってるけど何を根拠にそんな自信を持って言えるのだろう

ア：『……くるよ』

何が——と問いかける前に私にも感じられた

急いで水陣壁を私たちの周りに作る

工：「きやあ！」

作ると同時に圧縮された魔力の塊が全方位に飛んでいく

私が張った壁も一瞬で消し飛んでしまった

一体どれだけの魔力を込めればこれだけの威力になるのだろうか？

飛んできた魔法の余波で私たちも施設の壁の方まで吹き飛ばされる
ついでに吹き飛んだ勢いで舞った砂埃が中の様子を隠す

どうなったのか？

まさか負けてしまったのか？

そんな悪い予感が頭をよぎる、でも——

ア：「俺の勝ちだ」

聞きたかった声が勝利宣言と共に聞こえてきた

いやー、えらい目にあつた

あの後、ガイアスとうる覚えで契約をしたのはいいのだが、ガイアスが消えてからの賞賛や質問の嵐が凄かった

もみくちやにされている間にいつの間にか意識が彼方に飛んだ——らしい

今は本棟の保健室にいる

気絶している間にここへ運ばれたようだ

人払いでもしてあるのか

静けさが辺りを包みこんでいる

…どれくらい寝ていたのだろうか？

不意に廊下から人が歩いてくる靴の音が鳴り響く

コツコツコツ、ガラララッ

エ：「あ、起きたんだね」

入ってきたのはエリン1人だった

ア：「ああ、心配掛けたな。俺はどのくらい寝てたんだ？」

エ：「んー…2時間ぐらいだよ。一応、アラン君は契約も終わったしドラゴンとの戦闘もあったから先に休んでもいいって先生が言ったの」

ア：「そうか。…契約した実感がないな」

エ：「…そう」

沈黙が2人を包む

気まずい雰囲気がお互いの顔から見てとれる

そして——

「「あのさ！？」」

同時だった

ア：「エリンからでいいよ」

エ：「ううん。アラン君から」

……

10分後

ア：「じゃあ俺から……他の3人は？」

先に折れたのはアランだった

（『というか時間かかりすぎだな』）

エ：「みんなはまだ施設にいるよ。時間的にもうすぐお昼だけど」
言われて壁の時計を見るともうすぐ12時になるうとしていた

ア：「もうそんな時間か。…一先早いけど食べに行くか？もちろん、
エリンの質問に答えてからだけど」

エ：「…私は——」

エリンを見ると顔が真っ赤だった

熱でもあるのだろうか？

エ：「私は——っ、や、やっぱりいいです！さあ、食べに行きましょう？」

出かかっていた言葉を飲み込むとエリンは微笑んでアランを食事へと促す

しかし、その笑顔は少し無理があり、辛そうだった

ア：「……そうだな。食べに行くか」

本当に大丈夫なのか——辛いことがあるなら相談してほしいと思うが、その言葉を心の中にしまいこむと決めたアランはこれ以上心配をかけまいと笑顔で答える

しかし、エリンの辛さの原因が自分であることや自らの笑顔にも辛さと苦しさが映っていた事にアラン本人は気づかなかった

第七話 噂と契約（後書き）

どうも、お久しぶりです

最後の方で妙なシリアスの要素（？）が入りましたが、自分の感情的はそっち系は無理ですね（苦笑）

ほんとにはラブ系要素を入れるつもりだったのに……

ついでに戦闘シーンは何度書いても難しいです

そして、今回、あまりの量に話を分けることとなりました

ア：「だからどうしたよ」

あ、勝手にここへは来ちゃだめでしょ

ア：「良いだろ。俺のシーンの途中なんだし」

まあ、次回は今回の召喚魔達とのあれこれについて書く予定ではあるんだが……

ア：「……だが……なんだ？」

君の召喚魔のガイアスをどう戦わせるか迷ってるんだよ

ア：「普通に戦わせるだけじゃだめなのか？」

大きさと強さの面でね、というか話し次第では性別も変えないとい

けないし…

ア：「ふーん…まあがんばってくれ」

はいよ。さて、次回【契約者】お楽しみに！

今回から次回予告でも書こうかと（笑）

感想、誤字脱字があればよろしくお願いします！

第八話 契約者（前書き）

遂に更新しました

お待ちしてた方は申し訳ありません

今後も良き作品を書けるよう精進していきます！

まあ、駄文に違いはないですが（笑）

第八話 契約者

【第2召喚施設】

昼を食べていくらか元氣を取り戻したかに見えたエリンだが、アランの目にはまだ無理をしているように映った

しかし、本人が言わない以上、部外者が踏み込むことは許されない
と思い、少し後ろから後ろ姿を見つめる

エ：「午後からは召喚が終わった人は他の終わった人と召喚魔のみで戦わせる時間になるよ。私たちの班は全員終わったから、そろい次第、始めようね」

ア：「ああ。場所はさっきの場所でいいのか？」

エ：「ううん、第5闘技場に移動するよ。だけどバラバラになるのは得策じゃないから一度、こっちに集まってから全員で闘技場の方に移動する手はずだよ」

話しながら施設へと向かう

しかし：さっきからエリンとの会話に違和感を感じる…気のせいだろうか？

考え事をしている間に施設の扉の前にたどり着く

扉を開けると、あちらこちらで魔法陣が光っているのが見える

昼を過ぎているが、食べに行つて生徒は少ないようだ

そもそも全員が終わった班は自分たち以外ないようで、少し暇になる

ケ：「おお、おかえり。気分はどうだ？」

ア：「まあまあだな。というか、他はまだ終わってないのか？」

メ：「私たちが早すぎただけだよ。普通なら1時間ぐらい軽く過ぎちゃうし」

ア：「そんなにかかるものなのか？」

エ：「契約には自分の魔力が大きく関わってくるので……量が少な

いと契約時間が長くなりかけます」

ア：「ふーん…そういうもんなのか…ということは全員凄いな」
ケ：「今さらかよ。だが、一番すごいのはアランなんだぜ？」

メ：「なんとたつてドラゴンと契約したからね！来週に配られる学園新聞に載るんじゃない！？」

ア：『来たばかりでギルドランクBで召喚魔はドラゴン…話題性抜群だね』

ア：「面倒だな…たくっ…？エリン？…どうかしたのか？」

エ：「え！？ううん、何でもないよ」

さつきからエリンと目が合っただけは顔を反らされ、俺の顔を見てはボ
ーッとしているが大丈夫だろうか？

…もしや、俺の顔になんかついてるのだろうか？

メ：「……………（じー）」

エ：「…どうかした？」

メ：「エリン…ちょっとこっちに来ようか？」

エ：「ちよっ、ちよっ顔が怖いよ…？」

メ：「大丈夫。ちょっと聞きたいことがあるだけだから…（につこ
り）」

エ：「いや、ほんと大丈夫だから！ほんと！だからやめて…！！」
首襟を掴まれて逃げようにも逃げられず、メシアに引きずられていく
エリン

引きずられている間、哀れな悲鳴が続いたのは言うまでもない

ケ：「あゝあ…行っちゃったよ」

ア：『まあ、彼女の代名詞でもありますし、仕方ありませんね』

ア：「どんな代名詞なんだ？」

「「笑顔の魔女」」

ア：「……………なぜ？」

ケ：「連れ去るときは笑顔で抵抗させず」

ア：『追い詰めるときは魔女の如く狡猾に』

ケ：「狙った獲物は逃さない！…それが祟って、裏ではそう呼ばれ

てるのさ」

ア：「つまり… お前も大変なんだな」

ケ：「（ギクツ）な、何がだ？」

ア：「… まあいいけど」

ア：『ほんと自分のことじゃないと鋭いんだから…』

アクアに何か言われた気がしたが無視だ無視

20分後

俺らは体を休める為、休憩所にいる

理由は簡単だ

メシアがエリンを連れ去ったまま帰ってこないからだ

ケルト曰く、戻ってくるのに10分以上はかかるらしいので立つて

待つのも何だからここに來たわけだ

待っている間、ケルトとアクアは何やら目をつむって瞑想をしていた

そのせいで俺は暇だ

ア：『すまないね』

声をした方に振り向くといつももの爽やか笑顔で笑っているアクア

ア：「いや、大丈夫だ。それより何をしてんだ？」

ア：『召喚魔との対話だよ』

ア：「へえ、対話か。何を話すんだ？」

ア：『人それぞれだけど、最初は精霊自身の事や俺自身の事について話したり、力について聞いたりだな』

ア：「それぞれ違うからだな。対話をするにはどうすればいい？」

ア：『目をつむって自分の心の中を見に行けば分かるよ。例えば…』

…心を静めて、相手に語りかけるように——かな？』

心の中……か

…ブルブルブル！

俺は嫌な記憶を頭を振って無理やり消し去ると、アクアに言われた通り、心を静めてガイアスに語りかけた……

ずっと浮かび上がる気分になる
体がふわふわと浮いて気分が良い
ここはどこだろうか……

「起きよ、我が主よ」

遠くから俺を呼ぶ——そんな声が聞こえた

「起きよ。いつまでそこで眠るつもりだ？」

すぐさま目が冴える

一伸びした後、辺りを見渡す

ちよつど、真後ろに人が見える

ア：「あれ？人？」

「どうした。そんな不思議な顔をして」

ア：「いや、君誰さ？」

「な、我がわからないだと？今さっき契約したばかりだというのに！」

ア：「（契約？…）ってまさか！ ガイアスなの？」

ガ：「その通りだ。よもや、我が主に間違えられるとは……」

ア：「いやだって、君、女の子だし！」

ガ：「ん？何を寝ぼけたことを。我は女。雌のドラゴンだぞ？」

ア：「…な、なんだってええええええええええ！?!?!?!?!?!?!?!?!」

ガ：「落ち着いたか？我が主よ」

ア：「ああ、大分……」

目の前に先ほどから若い女の子がいます

年は…… 20ぐらいだろうか

背は俺よりは低いけど、高い方で、出るとこは出て、引つ込むところは引つ込んでいる

まさにモデルのようなスタイルだ

顔は可愛いというより凜々しい…

こういう人を完璧と呼ぶのだろうか？

ともかく、正直免疫がないから目のやり場に困る

つまり…

ア：「なんでそんな服が薄いんですか…？」

そう、彼女が来ているのは薄いワンピース

どこからそんな情報を仕入れたのか知らないが、かなり透けて困る

ガ：「別に。特に理由はない」

ア：「左様ですか。なら着替えてもらってもよろしいでしょうか…？」

ガ：「む。何故？」

ア：「…俺の理性が崩れそうなので」

ガ：「おお。なるほど、そういうえばそなたは学生じゃったな。なら

まだ（ピー）や（ピー）はしてないのか？」

ちよっ！何を言い出すんだ！

たしかにこっちに来てからはしてないが…って俺は何を言ってるんだ

ア：「まあそうですね…。してませんよ」

ガ：「ほうほう…若いのう」

ニヤニヤ笑うのは止めてほしい

そんな若い女の姿で言われても威厳の欠片も見えない

ア：「というか、姿は変えられないのですか？」

ガ：「ん？なんじゃ、もつと年下が好m「違うから」なんじゃ、違うのか」

残念そうに言わないでくれ

しかも、拒否したらしたで、瞳をうるうるさせながら上目づかいとか…可愛すぎる！

ガ：「残念じゃがこれが我の変化できる人の姿じゃ。変えることはできん」

ア：「じゃ、せめて口調だけでも変えれませんか？その見た目でその口調は変です」

ガ：「むう…わかったよ。どんな口調がいいんだ？」

ア：「…お嬢様系？」

ガ：「…なぜ疑問で返すよ…こんなのがお好みなのかしら？」

ア：「…グッジョブ（ビシッ）」

やっぱり、清楚な見た目だからお嬢様系はよく似合う

服はアレだが

ガ：「で、何の用かしら？…口調のせいで調子が狂うわ。できれば、もつと剣士とかみたいな凛々しい系の方がいいのだけれど…」

ア：「変えるのはダメだよ？用は君の事とかを知ろうと思って」

ガ：「なるほど。ならばお答えしましょう。…口調は元に戻したいのですが」

ア：「ダメ。では名前と属性。戦い方とか能力とかを教えてください」

ガ：「むう…。名前はガイアスⅡレイランドです。属性は見てわかるように雷。戦い方については基本的に主であるあなたに従いますが、普段は接近戦主体です。特殊能力は…契約している者の身体能力と魔法抵抗を大幅に上げることです。…まあ、主には必要ないかもしれませんが」

につこりと微笑むガイアスに思わず、ドキリとする

落ち着け、落ち着くんだ俺！

ア：「よくわかるな」

ガ：「契約しましたから」

契約すると相手の事が分かるのか？

ガ：「私は曲がりなりにもサンダードラゴンの長です。甘く見ないでください」

ア：「だって、俺勝ったし」

ガ：「う…反論できないのが悔しいです……」

少し俯くガイアスを見て慌ててフォローする

ア：「あ、いや、悪い。そういうわけじゃ」

ガ：「…ふふつ。冗談ですよ。そんな簡単に傷つきませんって」

再び微笑むガイアス

そんな彼女を見てほっとする

ガ：「話は終わりですか？ 終わりであれば次は私が主の事を聞いた
いのですけど」

ア：「いいけど、俺の呼び方もどうにかできない？」

ガ：「そうですね…… 御主人様とかはどうでしょうか？」
ぐはっ

まさかそうくるとは…

しかも確信犯っぽい笑顔……

ア：「普通にマスターでいい……」

ああ、俺は灰の様に燃え尽きたよ……

ガ：「ではマスター。改めて名前と属性、武器を教えてください
ますか？」

ア：「ああ。名前はアラン・クリアフォード。属性は雷。武器は剣
だ」

ガ：「…… 嘘ですね？」

ア：「!!」

な、なんだと？

まさか、偽名だと見切られたのか？

ガ：「属性は魔力を見ればわかります。そしてマスターが魔法陣に
注ぎこんだのは虹。つまり、本来ならありえない全属性を使えるこ
とになります。そこまでは合っていますか？」

ア：「…… ああ」

ガ：「では続けます。そして、全属性が使える以上、マスターは特
別な加護を受けている方と考えられます。…… マスター、貴方はなん
らかの加護を受けていますね？」

…… すごいな

魔力を見ただけでそこまで考えつくとはな
顔を見れば確信している様子だし

ア：「…… ふう… よく気がついたな。その通り、俺には神の加護…

…というより、神の力を授かってるよ」

ガ：「…失礼かもしれませんが、どんな加護を…？」

ア：「全属性を完璧に使えて、魔力はほぼ無限大。身体能力は超人レベルだな」

そう、試したんだ

あのバカ（神）がほとんど説明をしてくれなかったからな

森の中である程度のことはやったわけさ

走り続けたり、岩を殴り続けたり、魔法を（変なイメージで）ぶっ放し続けたり…

その結果、疲れない、痛くない、壊れないという素晴らしい体だということがわかったわけだ

ガ：「…それはすごいですね。私が負けるわけです」

ア：「落ち込むことはないからな？」

少し落ち込むガイアスをなんとか慰める

ついでに俺はガイアスにこれまでの事を話した

俺の相棒となるんだし、彼女ならちゃんとわかってくれると思ってのことだ

ガ：「つまり、マスターはこの世界で生まれたのではなく、異世界から来たと？」

ア：「ああ、だからこの能力のほとんどは神から貰ったんだ」

ガ：「ふむ… 私たちにとって神とは精霊王の事ですから。その神よりさらに上の存在となると考えようがないです」

ア：「まあ、見た目はただの女の子だけだな」

ガ：「へえ… 会ってみたいものです」

ア：「機会があつたらな」

そのあとは他愛のないことを話し続けた

俺が住んでた世界の事

ガイアスが住んでる世界の事

魔法の事を詳しく知らない俺のために魔法の講座を開いてくれたり、ガイアスの知ってる魔法を教えてくれたり…

気が付いたらかなり話し込んでいたようだ

ガ：「そういえばマスター。時間は大丈夫ですか？」

ア：「時間？……ああ！そういや、休憩時間を利用して来てたわ」

ガ：「はあ……ここはマスターの心の中ですから、マスターが時間の速さを決めれます。大体、現実を1とすると、ここを100にするとか……」

ア：「なるほど。今度からそうするかな。……さてよ？今はどうなってるんだ？」

ガ：「知らないと思ったので私が決めておきました。おそらく10分ぐらいかと」

ア：「ありがとう！さすが俺の相棒だ」

ガ：「相棒……できれば嫁とか……（ボソボソ）」

ア：「ん？どうかしたか？」

ガ：「いや、何でもないです。そろそろ帰るといいでしょう。また後で会いましょう」

ア：「ああ！……ついでに話し方は剣士風でも良いよ」

後ろから「今さら！」という声が聞こえた気がするが気のせいだろう段々辺りに白い靄が広がっていく

そのまま俺の意識は下へ下へと落ちていった

ア：『気がついたかい？』

気がつくと俺は長椅子に横たわっていた

ア：「……俺は何で横になってるんだ」

ア：『急に倒れたからね。大丈夫！慣れれば瞑想してるように見えるよ』

ア：「そうか。……ちなみにケルトは？」

ア：『……途中からどこかに歩いて行ったよ。』

ア：「…そうか」

時計を確認すると先ほどから10分ほどたっていた
ガイアスに感謝だ

ア：「というか、エリンとメシアは？」

ケ：「もうすぐ来るよ」

急に後ろからケルトが現れた

ケ：「エリンが少し涙声でメシアに『それだけは止めて！』って叫んでたよ…」

ア：「…あとで慰めないとな…」

エリン：大丈夫かな？

エ：「ひどい目にあった…」

あれから5分後

少しやつれたエリンがニコニコしたメシアと現れた

メ：「良いこと聞いたな」
♪アラン♪？ちゃんと気づいてあげてね？」

エ：「ビクッ」

ア：「…？何をだ？」

ア：『先は長そうだね（苦笑）』

エ：「は、早く闘技場に行こう？ね？ね！？」

エリンが真っ赤になってみんなを急かす

アクアが何かに気づいているようだが何のことだろう？

ケルトはニヤニヤしてるし

気づかないまま俺たちは闘技場へと向かって行った

【第5闘技場】

というわけで、闘技場に來たわけだが…

見ての通りギクシャクしている

エリンは時折俺を見ては目をそらすし、メシアはそれを見て笑っているし。

ケルトはエリンをニヤニヤしながら見て、アクアは我関せずといった笑顔で見ている

いい加減疲れた

ア：「そろそろここに來た予定をやろうぜ」

ケ：「そうだな。各自契約者を召喚しようぜ」

「「「おおー」」」

各自精神を集中し

「「「我と契約し者よ。契約に従いその姿を現せ！」」」

アラン以外が詠唱を唱えた

いろんなところで魔法陣が現れ、光の中から影が浮かびあがる

各自の近くの魔法陣から契約した精霊、および動物が現れる

改めて言うと、エリンが光の精霊、メシアが風の精霊、ケルトが火の獣、アクアが闇の精霊だ

エ：「あれ？アラン君は出さないの？」

ア：「ああ、大きいから他が出してからの方が安全かなって思ってたさ」

ケ：「…これで天然要素が入ってるから何も言えないんだよね………確信犯なら蹴るのに……」

急に悪寒がしたが、気のせいだと思い、無詠唱で召喚する

エリンたちがドキドキする中、現れたのは――

ガ：「呼んだか、マスター？」
凛々しい美女姿のガイアスだった

ケ：「アラン……お前、こんな綺麗な女の子と契約してたっけ？」
メ：「アラン……私という女が居ながら「違うだろ」てへっ」
たくっ……ゾクッ

後ろからさっきの悪寒が嘘に思えるぐらいの恐怖が襲いかかる
ブリキ人形のように恐る恐る振り返るとそこには――

エ：「誰かな、その娘は？」

――目が笑ってない笑顔で微笑んでくるエリンが居た

ア：「というわけで、俺と契約したドラゴンのガイアスだ」

あれからエリン（+α）に必死で弁解した

エリン以外はわかってくれたが……

エ：「……………」

ア：「な、なあ、エリン？」

エ：「何？」

ア：「その……機嫌直してくれよ」

エ：「……………」

機嫌を訪ねてはまた不機嫌になるという無限ループを繰り返していた
流石に暇になったのかケルトたちも説得に加わり、そして――

エ：「じゃあ、今度の休日に私の買い物に付き合ってね？」

という買い物（という名のデート）に行くことで機嫌を直した
ちなみにこの提案をしたメシアはというと

メ：「ふっふっふっ……………」

怪しく笑っていた

ケ：「さて、全員契約者を呼んだし、本題に入ろうか」

メ：「チーム分けとかはどうするの？」

ケ：「力の関係上、アラン対4人がいいんじゃないか？」

ア：「アクアもかなり強いと思うんだが…」

ア：『そうでもないよ』

エ：「とりあえず、時間を決めて戦いましょう？その結果で少しずつ変えて行けばいいわけです」

エリンが締めると俺はガイアスと共に反対側のサイドに向かう
歩きながらガイアスに話しかける

ア：「じゃ、適度に頼むわ」

ガ：「本気じゃなくてもいいの？」

ア：「その辺の判断は任せる」

ガ：「わかった」

【エリン side】

そろそろアラン君の精霊と私たちの精霊の対決が始まる
だけど、私の関心は他にある

それは、アラン君と契約してる、あのガイアスというドラゴン（の美女）の事だ
アラン君が彼女と話をする姿を見て私の胸は締め付けられるように苦しかった
たしかに彼女は私にはない魅力を感じるし、戦闘能力や技術も上回るだろう
なにより、女である私から見ても羨ましく思う程の外見を持ってる私なんかよりずっと2人はお似合いだろう
でも、私は…
私は…あきらめたくない！
あなたのことを…本気で…
本気で想ってるから……

【ケルトside】

色々トラブルはあったがようやく精霊同士のバトルを始めれる時が来た
隣では何かのオーラをまとってるエリンがスゴイやる気を見している俺も負けたくないぜ
ア：『戦うのは精霊だけだね』
うぐっ
それを言うなよアクア……

ア：「じゃ、準備は良いか？」

メ：「こつちはいいいよ！」

エ：「絶対負けない……！」

ア：『だから俺たちが戦うわけじゃ……』

ケ：「アクア……あきらめろ」

エ：「いけ！ランス！」

ラ：「御意」

ガ：「無駄だ」

槍と剣が交わる

激しい火花が散り、お互い離れては一瞬で間合いを詰め、また切り合う

しかし、段々とランスは追い詰められていく

近距離の剣に対して槍は防戦一方となっていた

ケ：「グレア！」

グ：「ガウツ！」

グレアが火炎球を大量にガイアスに向けて放つ

しかし、火炎球がガイアスに届くことはなかった

ガ：「雷龍砲！」

ガイアスが放った巨大な雷の束が全ての火炎球を飲み込み、こちらに向かってきた

メ：「シルフ！」

シ：「お任せを」

不意に視界が変わる

シルフが風で防御したみたいだ

ケ：「さすがに強いな……」

メ：「多方向から一気に攻めるしかないね」

エ：「じゃあ、防御を解いた瞬間が勝負だね」

ア：『オルゴ……頼んだよ』

オ：「ああ」

【ガイアス side】

目の前にはあの4人とそれぞれの精霊が風に護られている

私から攻める気もないし、どう動くか楽しみだな

メ：「今だよ！」

声を聞き、すぐさま剣を構える

いつの間に分かれたのか、四方向からそれぞれの攻撃の気配を感じた
普通の者ならやられてしまっただろう状況

だが――

ガ：「私は負けるつもりなどない！ライデンクウシン雷電空震！」

エ：「……んっ……」

あれ？

私、いつの間に寝たんだろう？

ア：「あつ、気がついた？」

目の前には覗き込むように私の顔を見るアラン君

エ：「ノノノア、アラン君！」

顔が目の前にある……つまり、彼女はアランに膝枕をされていたのだ
瞬時に自分の姿を考え、アワアワしながら慌てて体勢を起こし、周
りの状況を見る

どうやら、ここはまだ闘技場のようだ

しかし、辺りはひどい荒れ模様で、地面は抉れ、壁は壊れ、見学席周辺にはあちらこちらに大穴が空いていた

エ：「す、すごい光景だね……ねえ？ガイアスがスゴイ技を放った後から記憶がないけど、あれからどうなったの？」

ア：「ガイアスが雷の上級魔法を発動させたんだよ。全員を一撃で仕留める為に」

まあ、そのせいでここまでひどい有様になったんだけど、と苦笑気味に付け足した

しかし、エリンには最初の言葉しか耳に入らなかった

私たちは一撃で仕留められるほど弱いのだと落ち込んだ
なにより純粹に悔しかった

エ：「負けちゃったのか……」

ア：「いや、よく戦ってたと思うよ。そもそもガイアスはSランクだし」

エ：「え？」

ア：「あ」

……

エ：「……」

ア：「いや、あの、その……」

エ：「……」

ア：「だから、その上目づかいを止めてくれ……」

エ：「だって……じゃあ説明して？」

ア：「……時期が来たらな？」

エ：「やだ！」

ア：「だから……」

結局アランがエリンの言葉に押し負け、今度の休みに買い物（という名のデート）後にアランの部屋に行くこととなった

ア：「（俺の部屋なんか見て面白いのか？）」

エ：「（遂にアラン君の部屋に…そこで…私は…）」
2人の思惑が交り（？）合つ午後の一息であつた

一方、その頃――

ケ：「俺ら出るタイミングなくね？」

ア：『そこら辺は仕方ないですよ』

メ：「そうだよ！あのエリンが誘つてるんだよ！？温かく見守らないと！」

ケ：「隠れて見てる時点で、温かくはないと思うが…」

メ：「いいじゃん！あの2人の恋には興味あるし」

ケ：「な、俺という存在がありながら、お前は他の男に手を出していたのか！」

メ：「今の言葉をどう解釈したらそうなるのよ！」

ケ：「ゲブドラ！」

ア：『…十分うるさいのだが…』

2人の行動を見て少々頭が痛くなり、苦笑しかできないアクアだった

第八話 契約者（後書き）

お久しぶりです

試験が終わってすぐ書こうとしたんですが、だれてかなり遅れました（汗）

それはさて置き、今回も駄文にお付き合いありがとうございます

ケ：「よう。今回は俺なんだな」

よろしくお願いします

ケ：「こちらこそな。で、何話せばいいんだ？」

じゃあ、最近のメシアとのやりとりでも……

ケ：「！？い、いや…それはちょっと…」

まあ、その辺は私が説明するので問題ないですが

ケ：「ちょー！」

ついでにその時に貴方達の正体も……

ケ：「ま、待て！そこら辺は俺らが説明するから！勝手に話さないでくれ！」

ということで次回【買い物？デート？】お楽しみに！

ケ：「無視するな〜！」

しつこい（パチン）

ケ：「ギャデブッ」

あ、更新はいつになるかわかんないです（爆）

いつもの如く、感想、誤字脱字があればよろしくお願いします！

第九話 買い物？デート？（前書き）

後書きに重大な発表があります。

今回も駄文です。

分量も少ないです。

最後らへんは無理やりまとめた感じが否めないです…

楽しみにしている方々（いるのか？）申し訳ありませんm（- -）m

そういえば、いつの間にかPV5000、ユニーク10000達成してました。

ありがとうございます！

第九話 買い物？デート？

【ラグナ商店街】

今日は休日だが、朝早くから商店街に俺は居る

せっかくの休みだから休みたいのだが、ある約束のため、俺はこの噴水の前とある人物を待っている

集合時間は10時丁度

さすがに俺が遅れるわけにはいかないと思い、着いたのが9時丁度…分かつてる

柄にもなく焦りすぎたんだよ

こつちに来る前はこんなんびりと買い物することなんてできなかったからな……

とまあ、感傷に浸りつつ、目の前を通り過ぎて行く会社員やカップルを眺めているわけだが…

ア：「暇だな…」

エ：「ごめんなさい」

ア：「うわ！ってエリンか…。脅かすなよ」

エ：「普通に挨拶しただけで驚かないでよ……」

少し膨れっ面になったエリンを見て、俺は少しうれしかった――？

何が嬉しいのだろうか？

俺はこの気持ちをどう表現するべきなのかよくわからない

何なんだろうな、この気持ちは…？

エ：「どうかしたんですか？」

慌てて思考の海から意識を引き上げると目の前には近づき過ぎなぐらい近いエリンの顔が――

ア：「ち、近い」

エ：「あ、ご、ごめん」

慌てて顔を離す俺たちは傍から見たらどう見えるんだろうな？

初々しいカップルにでも見えるのかな？

それにしても顔が真っ赤だな…

エ：「あ、あの…」

ア：「ん？」

エ：「今日の服……どうかな？」

そう言われて改めてエリンの服を見る

白のワンピース姿

たったそれだけにもかかわらず、どこかのお嬢様にも見える格好だった

ア：「可愛い…いや、綺麗というべきかな？」

エ：「そうですか、よかったです」

少し頬を赤く染めつつ、ほっと一息つく姿は先ほどとは対照的に可愛かった

【エリン side】

今日は待ちに待ったアラン君とのデートの日！

今までオシャレなんて気にすることなんてなかったから慌ててお母さんに聞いたら

「あら？彼氏でも出来たの？早く孫の顔を見せてね？」

と、茶化された

その後なんだかんだで聞いてると、そこまで化粧とかすることはなかった

お母さん曰く、

「あんたは素材が良いんだから素で勝負した方が一番なんだよ!」
とからしい

私はそこまで自信がないのだけれど……

服は私のお気に入りの白のワンピース

アラン君が褒めてくれるとうれしいな……

そうこうしているうちに時刻はもうすぐ10時

慌てて集合場所である噴水のところへ急ぐ

噴水の前ではすでに彼の姿があつた

「(待たせちゃったかなあ……)」

少しため息をつきつつも後ろから側へと近づいてゆく

彼は前の風景を見たまま私には気づかない様子

それにしてもカッコイイなあ……

黒の上着とジーンズのラフな格好だけど、なんかこう……オーラが出
ているみたいな感じがする

実際、周りに行く女の子や女性の人々が彼を見てキヤーキヤー言つてた
うう……自信がなくなってきた……

そして――

ア：「暇だな……」

エ：「ごめんなさい」

ア：「うわ! ってエリンか……。脅かすなよ」

エ：「普通に挨拶しただけで驚かないですよ……」

予想外の返答に少しムツとするとアラン君は苦笑いしていた

そのまま思案顔に移ったので

エ：「どうかしたんですか?」

と、少し首をかしげながら彼の顔を覗き込むと――

ア：「ち、近い」

エ：「あ、ご、ごめん」

予想以上に近づいてしまった

あのままキスできたらな——とキスをできない今の自分の現状を見て少し後悔

もつと前からアプローチするべきだったかな

あ、それはともかく聞かないと

エ：「あ、あの…」

ア：「ん？」

エ：「今日の服……どうかな？」

そして、今日の聞きたいことの1つ、私の姿が彼の目にどう映っているのか？

良い評価だとうれしいのだけど

ア：「可愛い……いや、綺麗というべきかな？」

エ：「そうですか、よかったです」

その言葉を聞けて安心するも、彼の「可愛い」「綺麗」という言葉に少し赤面

は、恥ずかしいです……

【????side】

何時までも噴水前に居続けるのはもったいないと動き出す2人
そして、その動きを後ろからジッと見つめる怪しい影

「こちらKRT。本部どうぞ」

「こちら本部、M S A。K R T、状況をどうぞ」

「ターゲットは南に進行中。未だ手は繋いでおりませんが、先ほどからターゲット『エリン』の方が手を出したり引つ込めたりしてます、どうぞ」

「はあ…やっぱり1人で悩んでるか……。本部了解、そのままターゲットの追跡を続けよ」

「K R T了解」

K R Tとは俺ことケルトだ

M S Aはメシアだ

今俺たちは何をやっているかというターゲット…アランとエリンのデートを追跡している

なぜかって、楽しいからにきまつてるだろ？

アランは知らんが、エリンは誘われることはあっても、いつも断つてばかりだったからおそらくこういう類は今日が初めてのはずさつきから初々しい動き（手を出したり引つ込めたり）を続けている一方、アランは……慣れてるのか？

たまにエリンの方をチラツと見て微笑んでいる
そして――

「（見るのは構わないが邪魔だけはするなよ？彼女も今日を楽しみにしてたみたいだし）」

！？

おいおい、気づいてたのかよ…

ケ：「こちらK R T、ターゲットにバレていたようだ。しかし、邪魔をしなければいいようだ、どうぞ」

メ：「ねえ、面倒だから普通に話さない？というか、どこからこんなトランシーバーとか持ってきたのよ」

ケ：「アクアが『追跡かい？ならこれを上げよう』とか言ってくれたんだ」

メ：「…びっくりだね」

俺もびっくりだよ

【アランスide】

さて、ケルトとメシアがついて来ているのは知っていたが、彼女の喜び様を考えたら水を差されるのはどうも気分が悪いので、警告を念話で伝えるとしよう

まあ、あいつらもわかってくれるだろう

この話は打ち切りにして、問題は目の前の彼女だ

先ほどから手を出しては引っ込め、また出しては引っ込めるを繰り返している

そろそろかわいそうだし、俺からさりげなく動いた方がよいよな

ア：「今日は人も結構いるし、はぐれないように手繫がない？」

エ：「え？あ、うん…」

真っ赤になりながらも手を出すエリンはどこか壊れそうなガラスにも見えた

なぜそう思ったかは知らないが、そう見えた。

場所は変わって、今はカフェに来ている

色々な場所を見て回って、気がつけばすでに午後3時をまわっていたさすがにお腹もすいたので近くにあったカフェで軽食を取るとしよう

ア：「エリン。お腹は空いてない？」

エ：「ふえ！？あ、うん。なんか食べたいかも……」

…今日は一段と奇声が多いな

【エリン side】

うふふふふ……

はっ！

また意識がエスケープしてた…

でも、やっぱり夢じゃないかと思ってしまっ

なぜなら、目の前でアラン君が楽しそうに話す姿を見て、自分の心臓がドキドキしているのが分かる

これは夢のレベルじゃないよね…

私たちは現在、カフェでそれぞれの注文を言って、談笑をしているはあ…やっぱり夢みたい…

ア：「…さっきから意識がいろんなところに行ってるみたいけど、やっぱり、俺みたいなやつじゃ不満だね。ごめん」

エ：「え！？アラン君は大丈夫だよ！どっちかっていうと私が舞い上がりすぎてるだけだし…」

ア：「それでも、一瞬でも意識が違ふところに行くってことは俺に何らかしらの不満があるってことでしょ？だからごめん」

エ：「あうあうあう……」——なら、私の言うことを1つ聞いてもらってもいいですか？」

ア：「俺に出来ることであれば」

エ：「なら……はい、アーン」

私が！

私が夢にまで見た！

アラン君にアーンすること！

ふっふっふ……クールなアラン君と間接キス……

ア：「あゝん……んっ、そっちもおいしいね。はい、おかえしのあゝん」

！？

はわわわわ！？

アラン君からあゝんですと！？

これはチャンス！

エ：「あ、あゝん」

し・あ・わ・せゝ

【アランside】

時間は経って今は午後5時ごろ

そろそろ寮の帰宅時間である6時が迫ってきている

ここから寮までは30分かかるからね

ア：「楽しかったけど、そろそろお開きでしょうか？寮の帰宅時間が迫ってきてるし」

エ：「あつ、そつか。もうそんな時間かゝ…もったいないけど、仕方ないね」

さびしそつに笑う姿を見ると中々の罪悪感が…

戦場に生きてきた俺には無縁の世界だったはずなのに…

今では無くてはならない存在となつた世界…

俺は…いつまで居られるのだろうか…

願わくば、長き時を共にあらんことを…

エ：「どうしたの？」

ア：「ん、何でもないよ。じゃ、また学校でね」

エ：「うん、じゃあね」

夕日に照らされる彼女の背中を見ながら思い耽るある日の夕方…

(一方…)

メ：「おしかつたね」

ケ：「まあ、エリンのキャラが壊れてた気がするが…」

メ：「あゝ…そうだね」

ア：「仕様だから仕方ないよ」

ケ：「うお！何時から居たよ！？」

ア：「『こちらKRT。本部どうぞ』からだね」

ケ：「つまり、最初から居たわけだ…」

メ：「何の意味が…？」

ア：「特にはないよ。さて…来週からはいよいよ学内戦争だね…」

ケ：「去年は上級性が猛威を奮つてたけど、今年は負ける気はない

ね」

メ：「うん！」

ア：『まあ、今年はそれだけじゃないみたいだね』

ケ：「どういうことだ？」

ア：『あくまで噂だが…の話なんだけどね。学内戦争の際には個人別に順位が分かるだろ？』

ケ：「ああ」

ア：『その順位がある程度の数まで…初の試みとなる学園戦争に出場するらしい』

メ：「学園戦争？」

ア：『ああ。他の学園と模擬戦争をやるらしい』

ケ：「へー、たしかに今までにはない試みだな。形式とかはわかるのか？」

ア：『互いの学園グラウンド上に設置するフラッグを奪うらしい。戦争というぐらいだから死亡判定とかもあるんだろうけど、その辺はまだわからないね』

メ：「とにかく！今度の学内戦争で活躍して出ようね！」

ケ：「おう！」

第九話 買い物？デート？（後書き）

どうも、アクアです

書く内容がある程度は決まってるんですが、文量がどうしても少なくなってきたてしまいます…

今回、お伝えした学園戦争編はある程度長く書けるとは思っています…

さてさて、どうなる事やら？

ちなみに私事で申し訳ないのですが、一時的に更新を停止します

理由は書く暇がないからです、はい

8月を目標に再開したいと思います

……とまあ、建前上はそうなんですが、裏として…

最新作を考え中です

うっ、すみません、何しろネタが出てきちゃったもんですから（笑）

ちよっ！ミサイルとか撃たなくていいから！

と、いうことで、そちらがある程度書いたら再開、という流れにするつもりです

詳しい更新は活動報告を見ていただければ幸いです

では、次回「学園頂上決定戦」お楽しみに！

第十話 悪夢（前書き）

お久しぶりです！

久しぶりに書きましたが、前を見ると黒歴史に匹敵する下手さが・

・（汗

というか、自分自身がこんな書いてたのか不思議で仕方がない・

・

さらにキャラの性格が全く思い出せず、違和感があるやもです。

そしてお知らせですが、作中に書いた設定等を色々と弄ってあります。

これより前の話の設定は書き直していませんが、暇があれば直しておきます。

ついでに書き方も変えてあります。

因みに、今回の話しは大分前に書いてあったものを載せてあるのであしからず。

感想等よろしく願います。

第十話 悪夢

ん…朝か

今日から1週間は休日

久しぶりにのんびり――

「おはようっ！」

扉を開けた瞬間、何かが飛んできた

――文字通り『飛んで』だ

「ぐふっ」

そのまま俺の腹に突撃する

さすがに年頃の人間が飛びついてくるのは流石に痛い

「止めてくれ。朝っぱらから痛い…」

「うう…嫌なの？」

そんな小動物のようにクリクリした目をウルウルさせながら聞かないでくれ

「せめて勢いを失くして抱きついてくれ」

飛びついてくるなって言えなくなるだろう

「えへへへっ」

笑顔が眩しい

これが俺のいつもの日常の朝

もちろん、彼女無しではありえない日常だ

「で？今日の朝ご飯は？」

階段を降りながら前を歩く彼女に尋ねる

「白いご飯にお味噌汁。それに卵焼きに野菜サラダだよ」

前を向いたまま答えてくる

いつもと変わらない朝ご飯

机に並べられている朝ご飯を見て益々お腹が空く

「じゃ、食べますか」

そう言いながら席に着く

「うん！いただきます！」

元気にあいさつする彼女

俺も手を合わせていただきますの一言

時々話しながらご飯を食べていく

朝の貴重なこの時間

長いような、短いようなこの時間を毎朝大切にしている

考えているうちに学園に行く時間が近くなる

「おっと、そろそろ行かないとな」

慌てて残りのご飯を食べる

それを少し首を傾けながら微笑む彼女

そうして朝の時間が過ぎていく

「じゃ、行ってくるよ」

「うん。いつてらっしやい！チュッ」

頬に軽く触れる程度のキス

恥ずかしい気もするが嬉しく思う気持ちもある

俺と彼女の気持ち繋がつている証拠だから

「今日も行事の準備で遅くなると思うから」

「わかった。晩御飯準備して待つてるからね」

待つてるとか言うが彼女も学園に行くからこのやり取りは朝の儀式

みたいなもんだ

当然、彼女も制服の格好でこんな言葉を言っている

まるで新婚さながらの会話を小学生同士で言うのも何だかだとは思

うが、俺はあまり気にするつもりはない

昔もこうして過ごしてきたし、この先もこうやって過ごすつもりだからな

「ほら、早く行くぞ！」

「あ、うん！」

二人は駆けて行く

手を繋いで微笑みながら

紅葉並木を歩きながら空に目を向ける

次々と落ちてくる紅葉の葉に風流を感じつつも、これから来るであろう冬の寒さに身を震わせる

「どうかしたの？」

横から声をかけられる

「んー…もうじき寒くなるなって思ったからさ」

「そうだねー。学園祭が終わると見計らったように寒くなるからね」
学園祭が終わるころに急激に寒くなる

ちよっぴりロマンチックに考えると神様が見ているのだろうか…と
思えてしまう

もちろん、そういうわけではなく、最近では気の力が気象に影響していることがわかってる

この地方では火の性質を持つ気の力が弱くなり、水の性質を持つ気の力が強くなるため寒くなるのだとこの前、テレビで研究者が力説していた

まあ、そこまで興味もなく――

「ねえ！早く行こうよ」

おっと、考え事をしてたら歩くのを止めていたようだ

「ごめんごめん」

少し膨れながらも可愛い顔で俺を見つめる彼女
微笑ましく思いながらも頭をなでてやると

「ふにゅ〜」

可愛い声を出しやがって

ますます可愛く思えてしまう

ちよつとした並木道も

俺らにとっては小さな思い出

夕方、人々を夕日が照らす

俺は小走りで走っていく

愛しき彼女の元へ

いつも通り過ぎる近所の景色

赤みを帯びたり、橙がかっていたり

少し幻想的な今日の終わり

家まであと少し

もうすぐ彼女と触れ合える

そう思うだけで足が早くなる

しかし――

キキィー！ー！！

「えっ？」

ドンッ

曲がり角を渡る途中

俺は急に吹き飛ばされ宙を舞った

そして道へ投げ出された

どれだけの時が経っただろう

失われゆく意識の中で俺はいつものあの顔を探した

「……！」

その顔はすぐに見つかった

俺に重なるように何か叫んでる

大丈夫

俺は君の側にいるよ

そう、言いたかったのに

声が出なかった

口が少しだけ動いただけだった

そして、そのまま俺の意識は闇に落ちた……

二度と戻ることのないまま……

「いやあああああああ！！！！！！」

ガバッと布団を押し上げる

これは私の部屋

どうやら夢を見ていたようだ

忘れたい……あの悪夢を……

夢であればどれだけよかったかと何度も思う

思いだしそうになり、嫌な汗が身体中を流れる
学校に行く前にシャワーでも浴びよう
そう決めて、ベッドから抜け出し、階段を駆け降りた

私の名前はエリン

この悪夢は私が小学部にいるときの事
当時大好きだった……

3つ年上の兄、ルフェが死んだ時の話だ

第十話 悪夢（後書き）

次は七月中に出せたらいいなと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4950k/>

俺と私の英雄戦記

2011年8月12日02時40分発行